

アテナイ・ポリスの祝祭(一)

白 石 正 樹

目 次

はじめに

- 一 アテナイの春の祝祭
 - 二 アテナイの夏の祝祭(年末)
 - 三 アテナイの夏の祝祭(年始) (以上本号)
 - 四 アテナイの秋の祝祭
 - 五 アテナイの冬の祝祭
- おわりに

はじめに

ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』の「アテナイ」の節に次のように記した。——「当のアテナイ市域は平原のなかにある岩山とそれをぐるりと取り巻く居住地から成り、岩山の上はアテーナーの神域で『都城鎮護のアテーナー』の神殿は古く、殿内に消えずのランプがある。また、パルテノン神殿はイクティノスの建築、殿内にペイディアス作の象牙（・黄金）造りのアテーナー像がある。しかし、この市を賛めたたえその名声を宣伝する材料となった大量の記念物のなかへ入ってみると、本書でわたしが前もって立てた方針からその記述が逸脱してしまうのではないかと思ひ、書き過ぎを恐れてしまふ。それというのも、ヘゲシアスが述べた文句がわたしの後をついて来るからで、それによると『わたしはアクロポリスとそこにある三又矛が印したとてつもなく大きな跡を見、エレウシスを見、入信者としてその神事に与つた。あれがレオコリオンでこれがテセイオン。ひとつづつ説明はできない。アッティカ地方は神々が御自分のため手にお入れなさつた（神苑）であり、父祖にあたる英雄たちの持ち物だから』。」この文章はアテナイにおける宗教的記念物の豊富な様を述べたものである。アテナイの祝祭について調べてみると、われわれもまたその多様さに同様の印象を受けることであろう。アテナイ・ポリス（都市国家）の一年間は、民会、評議会、法廷など公的政治生活の合間をぬって、神々に捧げられた実に沢山の祝祭の連続であるから。

ところで、古代ギリシア社会における初期の暦の発明と使用は、ポリス内での宗教祭祀の儀式を体系化し、規則的ならしめるための企てであつたという。ポリスによって著しく異なる暦はこうして宗教的制度であつたし、そのポリスにおいて特定の宗教祭祀と供儀が、毎年特定の月の特定の日に行なわれるべきことを公言した。そのため暦は規範的、規定的であつたし、それゆえまた、ひとがそれによって集会や取引のような世俗的活動を予定したり、記録した

りしえる便利な枠組みを提供した。古代のギリシア人は、かれらの暦を神聖な目的にも、また世俗的活動にも用いたのである。アテナイ・ポリスの暦もおそらく宗教的^{1,2}制度として定められたものであったが、市民の公的生活を律する日付の規則としてはアルコーンと評議会の調整に委ねられる³制度となった。

アッティカ暦は十二月からなるが、各月の名称の由来と、その元の意味は次のようである。

ヘカトンバイオーンの月 (Ἑκατομβαιών. Hecatombaion)。—アポローンの祭祀に由来し、「百頭の牡牛」の意である。

メタゲイトニオーンの月 (Μεταγεθνεών. Metageithnion)。—アポローンの祭祀に由来し、「隣人を変える」の意である。

ボエードロシオーンの月 (Βοηδρομιών. Boedromion)。—アポローンの祭祀に由来し、「早駆け加勢」の意である。

ピュアノプシオーンの月 (Πυανοψιών. Pyanopsion)⁴。—アポローンの祭祀に由来し、「豆を煮る」の意である。
マイマクテリオーンの月 (Μαιμακτηριών. Maimakterion)。—ゼウスの祭祀に由来し、「荒れ狂う」の意である。

ポセイデオーンの月 (Ποσειδεών. Poseideon)。—ポセイドーンの祭祀に由来し、その神名をとったものである。
ガメリリオーンの月 (Γαμηλιών. Gamelion)。—(ゼウスと)ヘーラーの祭祀に由来し、「結婚」の意である。

アンテステリオーンの月 (Ἄνθεστηριών. Anthesterion)。—ディオニューソスの祭祀に由来し、「花の祭」の意である。

エラフェーポリオーンの月 (Ἐλαφηβολιών. Elaphebolion)。—アルテミスの祭祀に由来し、「鹿の狩人」の意である。

ムーニキオーンの月 (Μουνικίων. Mounyktion)。——アルテシスの祭祀に由来し、その祭祀名または地名をとったものである。

タルゲーリオーンの月 (Θαργελίων. Thargeilon)。——アポローンの祭祀に由来し、その「初穂奉納」の名称をとったものである。

スキロフォリオーンの月 (Σκίροφορτίων. Skirophorion)。——アテーナーまたはデーメーターの祭祀とされる「スキラ祭」に由来し、その名称をとったものである。

こうして、アッティカ暦では月名の半分以上が姉弟神であるアポロンかアルテミスに関連する名称を帯びている。すなわち、十二月のうちの第一月、第二月、第三月、第四月、そして第九月、第十月、第十一月の名称が、アポロンかアルテシスの祭祀に因んでつけられているのである。この二柱の神はともに小アジア起源の神と見なされており、その多くの祭祀はエーゲ海の左右兩岸のイオニア人に共通のものである。また、アッティカ暦ではゼウス、ポセイドロン、ヘーラーに因む月名がそれぞれ一つづつあるけれども、冬の季節に限られている。デルフォイの伝説では、アポロンは冬の間は極北の果(ヒュペルボレイオス人の国)へ去り、代わってディオニューソスがデルフォイにやってくると思われるが、アテナイの暦でも類似の傾向はうかがえるといえよう。なお、アッティカ暦はその第一月を真夏に定めている。そのため現在のわれわれのカレンダーと、ちょうど半年(＝六カ月)ほどずれていると考えると分かりやすい。それを四季に分けるならば、第一月、第二月は夏、第三月、第四月は秋―ただし、ひとによっては秋を認めず、この時期も夏に数える―、第五月、第七月は冬、第八月、第十月は春、そして十一月と十二月は再び夏である。

次に、アテナイ人にとっては、他のギリシア人と同様に、年よりもむしろ月が意義深い宗教的単位であった。だから、新年の祝い(元旦)はないが、新月の祝い(ヌーメーニア)は見られる。そして各月の日付の記述は、「新月の

日」一日に始まり、月の満ち欠けによって上旬、中旬、下旬を区別し、月末は「古くて新しい日」三十日で終わる。また、アテナイ人の月例の祭日として、次のようなものが確認されている。これらの祭日はいずれも月の上旬、「満ちる月」を占めている。⁽⁹⁾

一日。——ヌーメーニア (Noumenia) すなわち「新月の日」で、最も尊い日とされる。⁽¹⁰⁾

二日。——アガトス・ダイモーンの日。善のダイモーン (ἀγαθὸς δαίμων) は、地下神の形姿(宝角をもったシレノス)で表わされる。

三日。——アテーナーの誕生日。⁽¹¹⁾

四日。——ヘーラクレス、ヘルメース、アプロディーテー、およびエロースに捧げられた日。

六日。——アルテミスの誕生日。

七日。——アポローンの誕生日。

八日。——ポセイドーンおよびテーセウスの聖なる日。

さて、アテナイ・ポリスの年間の祝祭は、ポリス共同体の公的行事であり、国家祭祀の意義をもっている。したがって、その執行は資金調達から祭礼の組織・演出にいたるまでポリスの管理するところであった。この点、アリストテレスは『政治学』第六巻第八章の統治部門の説明に次のように述べている。——「しかし管理の他の部門として神々に関するそれがある、例えば神官 (θεοποιίαι) や神殿に關係のあることの管理者たちで、後者は現存の建物を保持したり、倒れそうな建物を修築したり、その他、神々を礼拝するために用いられることになっているものの面倒を見たりする。この係りは……神職から独立している、例えば司祭役、神殿警備役、神財会計役 (ἐποριταῖοι καὶ ναυπηγικαὶ καὶ ταμιαὶ) などがそれである。この係りについて、凡ての公共の供儀 (τὰς θυσίας... τὰς κοινὰς τράσας) のために任命された係りがある、ただしこの公共の供儀というのは法律が神官たちに委ねないものであるが、公共の祭壇

で営まれるものであるために尊重されているものごとである。これらの人たちを或る人々はアルコーンと呼び、或る人々はバシレウスと呼び、或る人々はプリュタニスと呼んでいる。¹²「ここではポリス共同体の祭祀のために、宗教的職能である神官の役割と並んで、かつそれと区別されて世俗的役人の果たす宗教的役割（＝公共の供儀）がはっきり指摘されている。そして、アテナイでは、ポリスの諸々の祝祭を管轄する任務は主に三人のアルコーン——筆頭アルコーン、バシレウス、ポレマルコス——に与えられていた。¹³またその他に、大パンアテーナイア祭のために四年任期の十人のアツロタイ（競技委員）、四年目ごとの祭祀のために十人のヒエロポイオイ（年ごとの犠牲委員）、そして臨時の災厄のために十人のヒエロポイオイ（贖罪の犠牲委員）が選出された。¹⁴

そのうち、アルコーン（政務長官）の宗教的任務と考えられるものは、1、悲劇競演のために合唱隊奉仕者（コレーゴイ）として、全アテナイ人の中から最も富んだ人三名を任ずること。2、都市ディオニュシア祭とタルゲリア祭のために、部族の出した合唱隊奉仕者を受け取ること。3、デロスの祭りに送る合唱隊奉仕者や使節長を任命すること。4、祭列（ポンペー）——癒しの神アスクレーピオスのための祭列、都市ディオニュシア祭の祭列、タルゲリア祭の祭列、ゼウス・ソーテールのための祭列——を監督することである。また5、彼は都市ディオニュシア祭およびタルゲリア祭の競技をも司る。¹⁵

また、バシレウス（王）の宗教的任務と考えられるものは、1、監督役たち（エピメレータイ）とともに、秘儀（ミュステーリア）を監督すること。その監督役たちは民会が挙手により選出し、二人は全アテナイ人から、一人はエウモルピダイ氏族から、他の一人はケーリュケクス氏族から選出される。¹⁶2、レーナイオンのディオニュシア祭（＝レーナイア祭）を監督すること。3、松明競技（ランパドーン・アゴーナス）全部を司ること。それはパンアテーナイア祭、ヘーパイステイア祭、プロメーテイア祭、パーンの祭その他に催された。そのうえ4、「バシレウスはまた父祖伝来の供儀（*ταῖς πατρίοις θυσίαις*）のすべてを管掌するといつてよい」とされる。¹⁷

さらに、ポレマルコス（軍事長官）の宗教的任務と考えられるものは、1、アルテミス・アグロテラ（＝狩場に座す）と（アレース姿の）エニユアリオスとに対する供犠（テュシア）を捧げること。2、戦没者のための葬送競技（アゴーナ・トン・エピタフィオン）を掌ること。また3、ハルモディオスとアリストゲイトンに対する追悼奉納（エナギスマ）を行うことである¹⁸。

このようなことを前提として、われわれは本稿においてアテナイ・ポリスの祭祀の多様性を、その年間行事（例年の祝祭）に沿って把握していきたい。ただし、その際アッティカ暦の第一月から第十二月まで月毎に順に記述するのではなく、その上位の区分として仮に四季のワク組を導入することにしたい。季節のワク組の設定は、当時のアテナイ人の祭の多くに反映されていたに違いない季節感——大麦、葡萄、オリヴの農耕サイクル、航海の開始、冬の到来など——を捉えやすくするためである。それはまた、アテナイの多様な祝祭を、季節毎にある程度まとまりをもって考察することを可能にするであろう。古代のポリスの祝祭ではあるが、春に行なわれる祭、夏に催される祭（ただし、夏の間を新年を迎えるので、本稿ではそれをさらに、年末と年始に分けた）、秋祭り、そして冬の祭りという記述の順序は、比較的自然的流れをなすと思われる。

この点、有名なハギオス・エレウテリオスの「カレンダー・フリーズ」が参考になる¹⁹。このフリーズの左端は春の祭りを表わす図柄から始まっている。ただし、一番左端にあったと想定されるアンテステーリオンの月の図柄は切り取られており、確認できるのはその翌月エラフェーポリオンの月の都市ディオニュシア祭の図柄——喜劇役者と雄山羊——である。つづいて、夏の祭り（ディポリエア祭の雙刃の斧と牡牛、パンアテーナイア祭の船——クロスで消されているが——の図柄など）、秋の祭り（フリーズの中央近くに、大秘儀祭を表わす若きエフェーボイの護送隊、またピュアノプシア祭のエイレシオーネーの枝の図柄が見える）、冬の祭り（ポンパイア祭の時期の耕作と種まき、田舎ディオニュシア祭の演劇的アゴーンの図柄など）と続き、右端はガメーリオンの月の図柄（レーナイア祭

とテオガミア祭)で終わっているのである。(8)

注

- (1) *The Geography of Strabo*, IX, 1, 16. Loeb, 8 vols, IV, pp. 260-263. 飯尾都人訳『ギリシア・ローマ世界地誌I』、龍溪書舎、一九九四年、C三九六頁。なお引用に際しては、本稿の他の部分の記述との統一を図るために、神名に長音符を加えた。以下、他の邦訳からの引用も同様である。
- (2) Jon D. Mikalson, *The Sacred and Civil Calendar of the Athenian Year*, Princeton University Press, 1975, p. ix.
- (3) 挿入日 (intercalation) による調整はその典型的例でもある。Mikalson, op. cit., pp. 3-4. なおアテナイ人は、通常のカレンダー＝祭礼暦 (festival year) の他に、評議会 (conciliar year) を使用した。前者は陰暦で、一二カ月、三五四日をもって通常の一年とする。閏年があり、その計算は複雑である。後者は行政上の暦で、一年を各プリュクテネイアによって十等分する。村川堅太郎訳『アテナイ人の国制』、岩波書店、一九八〇年、二二七―二二八頁訳註参照。
- (4) Πυρρανεψιόνの月 (Πυρρανεψίων. Pyanepsion) ともいふ。
- (5) Erika Simon, *Festivals of Attica, An Archaeological Commentary*, The University of Wisconsin Press, 1983, p. 4.
- (6) 農耕との関係では、第一月～第三月は乾期で暑い夏、それに続く第四月は播種期である。第五月～第九月は雨期で牧草や麦が育つ。この五カ月間は農繁期である。その後の第十月～第十二月は農閑期であるが、その後半は麦の収穫期にあたる。この点、例えば、岩片磯雄『古代ギリシアの農業と経済』大明堂、一九八八年、八〇頁参照。
- (7) H. W. Parke, *Festivals of the Athenians*, Cornell University Press, 1977, p. 29.
- (8) ギリシア人の日付の記述は次のようである。——一日 *νομήνια* (「新月の日」の意) 二日 *δευτέρα ἰσταμένου* (*ἰσταμένου* = 「上早まる」始まる) の意) 三日 *τρίτη ἰσταμένου* 四日 *τετράς ἰσταμένου* 五日 *πέμπτη ἰσταμένου* 六日 *ἕκτη ἰσταμένου* 七日 *ἑβδόμη ἰσταμένου* 八日 *ὀγδὼν ἰσταμένου* 九日 *ἐνάτη ἰσταμένου* 十日 *δέκατη ἰσταμένου* 十一日 *ἐνδέκατη* 十二日 *δωδέκατη* 十三日 *τρίτη ἐνὶ δέκα* (ἐνὶ δέκα = 「十日後」の意) 十四日 *τετράς ἐνὶ δέκα* 十五日 *πέμπτη ἐνὶ δέκα* 十六日 *ἕκτη ἐνὶ δέκα* 十七日 *ἑβδόμη ἐνὶ δέκα* 十八日 *ὀγδὼν ἐνὶ δέκα* 十九日 *ἐνάτη ἐνὶ δέκα* 二十日 *εἰκοστή* (または *δέκατη προτέρα* と記述される) 二十一日 *δέκατη ὑστερά* 二十二日 *ἐνάτη φθίνουρος* (φθίνουρος = 「月の欠ける」終わりに向かう) の意。代わりの *μετ' εἰκάδα* = 「二十日後」が使われる。二十三日 *ὀγδὼν φθίνουρος* 二十四日 *ἑβδόμη φθίνουρος* 二十五日 *ἕκτη φθίνουρος* 二十六日 *πέμπτη φθίνουρος* 二十七日 *τετράς φθίνουρος* 二十八日 *τρίτη φθίνουρος* 二十九日 *δευτέρα*

- φθίνουρος' 三十日 ἐν καὶ νέα («古くて新しい日」の意。ただし、全二九日しかない月の場合には、その最終日が ἐν καὶ νέα と記される) cf. Mikalson, op. cit., p. 9.
- (9) Mikalson, op. cit., p. 24.
- (10) この日、月例の供物 (ἐπιθύματα) の国家奉納が行われた。アクロポリスの守護者とされた神域内に棲息する蛇には、蜂蜜入りの菓子を供えた。Herodotus, VIII, 41. 松平千秋訳『歴史』、筑摩書房、一九六七年、三七九頁。また、私的な宗教的实践としては神々の像に乳香を供えた。Mikalson, op. cit., p. 15.
- (11) なお、アテーナーの誕生日については、パンアテーナイア祭との関係で二八日(11月末より三日目)とする説もある(Simon, op. cit., p. 55; Parke, op. cit., p. 33)が、マイカルソンによればそれは誤りである。その理由はオリュンポス神の誕生日はみな月の下旬におかれているからである。ハルポクラティオン(Harpokratian)に従って、アテーナーの誕生日は三日とせね(Mikalson, op. cit., p. 16., p. 23)。
- (12) Aristotle, *Politics*, BK. VI, 1322b. Loeb, pp. 526-529. 山本光雄訳『政治学』、岩波書店、一九六一年、三〇五—三〇六頁。
- (13) 九人のアルコーンの選出は次のようにしてなされる。——(一)……今では、テスモテタイ六人と彼らのための書記一人と更にアルコーンとバシレウスとポレマルコスとを順番に各部族から一人ずつ抽籤する。(二)これらの人々は書記を除いてまず五百人の評議会において資格審査を受け、書記は他の役人と同様単に陪審廷で審査を受ける……。 (三)審査の際にはまず「汝の父は誰でどの区に属するか、また父の父は誰か、または母は誰か、また母の父はどの区に属するか」と問う。次に彼がアポローン・パトロイオスとゼウス・ヘルケイオスを持っているか、またその神域はどこにあるか、また家族の墓はあるか、そしてそれはどこにあるか、また両親に対して親切であるか、また国家に納めるべきものを納めているか、またかつて遠征に参加したか否かを尋ねる。かかることを尋ねた後「以上についての証人を呼べ」と言う。(四)……しかるのち評議会においては挙手採決にかけ、陪審廷では投票にかける。」Aristotle, *Athenian Politeia*, LV. Loeb, pp. 150-153. 邦訳、九二—九三頁。なお、ニーチェの次の記述が参考になる。「世襲の役人より選挙による役人への移行、王制より執政官制(アルコーン)への移行などの動きと歩をともにして、それまで世襲の王位に結びつけられていたさまざまな祭司職も、特定の役人に結びつけられるにいたる。これらの役人は、この神もしくはあの神と、一定の神に終始奉仕する者ではなく、時にはこの神、時にはあの神と、さまざまの神に、国家を代表して奉仕することをもって職務とするものである。そして、このことによって、彼らはいわゆる祭司たちとははっきり区別されるのである。レクス・サクリフィクルス〔最高献祭司〕の職も、あちこちの地にあつては、たしかに依然王家の子孫たちによって占められてはいるけれども、しかし一部の地にあつ

ては、アテナイにおけるように、選挙によって任命されていた。」上妻精訳『ギリシア人の祭祀』、ニーチェ全集1、筑摩書房、一九九四年、四八七—四八八頁。

- (14) *Athenaion Politeia*, LIV, VX. Loeb, pp. 148-149, pp. 162-163.
- (15) *Athenaion Politeia*, LVI, 3-5. Loeb, pp. 152-155. 邦訳、九四—九五頁。
- (16) Cf. P. J. Rhodes, *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia*, Clarendon Press Oxford, 1993, pp. 636-637.
- (17) *Athenaion Politeia*, LVII, 1. Loeb, pp. 156-159. Rhodes, *Commentary*, pp. 683-639. バシレウスの宗教的任務として、他に松明競技のギムナシアルコイの任命、アレーフォリア祭の少女たちの任命などがあった。またアンテステーリア祭のとき、バシレウスの妻 (*basilina*) は「テオオニョーソスとの交わりと結婚の儀」の任務を帯びた。 *Athenaion Politeia*, III, 5. Loeb, pp. 16-17. 邦訳、一九頁。cf. Simon, *op. cit.*, p. 96. さらにバシレウスの宗教的でもある司法的任務として、次のことがある。——「瀆神に関する公訴は彼の前に提起され、神官職について他人と争う者があった場合も同様である。また氏族や神官たちに対して神事についてのすべての争いを裁定する。」裁定するとは、どの氏族または神官が一つの宗教行事を行なうべきかを決定するということをいう。 *Athenaion Politeia*, LVII, 2. Loeb, pp. 158-159. 邦訳、九七頁。
- (18) 前五—四三年に僭主ヒッピアスの弟ヒッパルコスを暗殺したハルモディオスとアリストゲイトンは、民主制確立後ただちに立像に刻まれた。それはアゴラの中央に立てられ、彼らは英雄半神として毎年ホレマルコスによる供犠奉納を受けた。幾らか宗教的オーラを帯びたその静止像は、称讃に値する個人を公的に記念する最初のモニュメントであった。ペルシア戦争後の前四七七—六六年に再建された二人の像は、(僭主に対し)武器を振り上げるその動作を刻んだものであった。cf. *Athenaion Politeia*, XVIII. Rhodes, *Commentary*, pp. 227-233. Herodotus, V, 55-56; VI, 109, 123. Thucydides, VI, 54-59. Christian Meier, *Athens: A Portrait of the City in its Golden Age*, tr. by Robert and Rita Kimber, Metropolitan Books, 1998, p. 83, pp. 187-188, pp. 262-263.
- (19) Hagios Eleutherios calendar-frieze (Little Metropolis, Athens) *ΠΙΣΤΥ* cf. J. Deubner, *Attische Feste*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1962, p. 248 ff. Simon, *op. cit.*, pp. 6-7. シーモンは「カレントー・フリースは前一世紀中葉のもの」と推定される。
- (20) Simon, *ibid.* またフリース中に、アッティカ暦十二月のそれぞれに対応する星座の図柄がちりばめられている。ただし、フリースの左右の端が切り取られているため、十二星座のうち、左端と右端にあったと想定される魚座と水瓶座の部分

が喪失しているほか、ムーニキオーンの月に相当する牡牛座がクロスで消されている。しかし、われわれは残りの九つの星座の象徴——雄羊、双子、蟹、獅子、乙女、天秤、サソリ、ケンタウロスの射手、山羊——を、春から冬への順に各月の祭の図柄の傍らに見出すことができる。

一 アテナイの春の祝祭

アンテステーリオーンの月の祝祭。——一日〜二三日、アンテステーリア祭（「ピトイギア」、「コエス」、「キェトロイ」からなる）。二三日、ディアシア祭。二〇日〜二六日の間の三日間、アグライでの秘儀祭。

エラフェーポリオーンの月の祝祭。——六日、エラフェーポリア祭。八日、プロアゴーン祭。八日、アスクレピエイア祭。一日〜二六日、都市ディオニュシア祭。一七日、パンディア祭。

ムーニキオーンの月の祝祭。——四日、エロースの祭。六日、デルフィニオンへの行列（ヒケテーリア祭またはデルフィニア祭）。一六日、ムーニキア祭。一九日、オリュンピエイア祭。日付不明、ヘーパイスティア祭。

先ず最初に、早春の花月の祭であるアンテステーリア祭（*Anthesteria*）は、アンテステーリオーンの月の一日〜二三日に行われる。その祭の名は本来、花（*anthes*）に由来し、草花の最初の新芽が出始める季節を象徴する。アテナイではこの祭の日に、三歳になった子供に花の冠をかぶせる慣習があった。実際、この祭の一面は、子供のための祭であることであって、かれらは贈物として絵付きの葡萄酒の広口瓶（*choai*）のミニアチュアを与えられた。アンテステーリア祭と花と子供との結びつきは、祭神のディオニューソスが葡萄酒の神であるのみでなく、また誕生と成長の神であることに由来するかもしれない。

この祭の三日間にそれぞれ「ピトイギア」（*Pithoigia*）、「コエス」（*Choes*）、「キェトロイ」（*Chytroi*）と呼ばれる祭がある。まず、祭の第一日（二一日）は「ピトイギア」＝「瓶開き」で、新酒祭と考えてよい。大きな陶器製の瓶

(pithoi) の中で発酵させた新しい甘口の葡萄酒の見本が取りだされ、リムナイ(沼地)にあるディオニューソスの神殿へ運ばれた。古代ギリシア人にとって葡萄酒は生で飲むべきものでなかったため、正しい割合で水と混合された最初の葡萄酒が神に捧げられた。次に、祭の第二日(一二日)はコエスⅡ「ジョッキ」の祭日である。しかし特異な慣習があって、この日の宴会では各自が葡萄酒のコウス(κοῦσις、約三・四リットル入りの広口瓶。複数形はコエス xoiētē)を持参し、自分の酒を、しかも黙って飲むというのがアテナイの伝統であったという。また、私的な宴会や国家の宴会において、葡萄酒を早く飲み干すという飲酒コンテストが行われた。おそらくこの祭の中日に、海からやってきたディオニューソスを再現する行列が催された。行列は車輪に載せた船をリムナイの神殿へ運ぶもので、船の上のディオニューソスは仮面をつけた役者によって演じられたと考えられる。それにサテュロスを表わす人々、二重笛の演奏者、カネーフォロイ(聖箠持の女性)、犠牲の生贄、供犠の用具を運ぶ青年たちが参加した。この日のもう一つの祭式は、バシリンナ(バシレウスの妻)が、プリュタネイオンの傍のブコレイオン(Boukoleion)で、ディオニューソスと結婚し、この神と結ばれるというものである。これは神聖なる秘儀に属するもので、詳細は何ら記録されていないが、海から到来した神が共同体によって受け入れられたことの一つの視覚的表現と見なされる。さらに、祭の第三日(一三日)はキュトロイⅡ「鍋」の日で、前日の祝賀とは全く違った様相を呈している。昼間、あらゆる種類の野菜の混合が鍋で煮られる。しかし、このようにして準備された食事は、死者のために地下のヘルメースに捧げるものであって、誰もそれを食べない。この日は死者の霊が生者の土地に自由に上がってきて放浪する、縁起の悪い日なのである。家長は入口にヤニを塗って、亡霊の侵入を妨げようとするし、各人は夜明けから保護的性質をもつと考えられたクロウメモドキを噛んでいた。そして、この日が終わるとき、霊は安全に追い出される。叫ばれる決り文句は、こうである。——「出ていけ、小悪魔(ケーレス)。アンテステーリアは終わった。」

次に、ディアシア祭(Diasia)はアンテステーリオーンの月の二三日に、アテナイのイリソス川沿いにある聖所

——前七世紀にはまだアテナイの郊外であった「アグライ」の地——で催された。それは「ゼウス・メイリキオス (Meilichios = 寛恕の) の縁起を祝う最大の祭」で、アッティカ人の共通の国民的祭典であった。⁽²⁵⁾ トウキュディデスは前六三二二年に僭主政治を企てたキュロン (Kylon) のクー・デターがなぜ失敗したかを述べるとき、このディアシア祭にふれている。すなわち、失敗の理由として、彼がデルフォイの神託を仰いで得た「ゼウスを祀る最大の祭の日」にアテナイ人のアクロポリスを占領すべし」という神意を解しそこねて、アッティカのメイリキオスの祭日でなく、ペロポネソスのオリュンピア祭の日に挙兵してしまったことを指摘している。ゼウス・メイリキオスは大地の神として大蛇の姿で表わされ、その儀式は鎮静・慰撫の感情を伴う厳肅なものであり、犠牲獣はホロコーストされた。トウキュディデスによれば「全市民あげての奉納」(ἡ πανδημική θυσία) が行なわれた。しかし、動物を犠牲として捧げる余裕のない一般の人々の奉納は、練り粉で作られた羊や豚の形をした菓子でよかった。⁽²⁶⁾ この国民的祭日は、アリストパネスの喜劇作品に描かれているように(『雲』四〇八、八六四)、⁽²⁷⁾ 家族で一緒にご馳走を食べたり、子供に山車の玩具(または菓子)を買い与えたりして朗らかな気分のうち終わったと思われる。

また、アグライでの秘儀祭 (Mysteries at Agrai) ——小秘儀祭 (Lesser Mysteries) という——は、アンテステーリオーンの月のおそらく二〇日と二六日の間に行われた(多分二三日を含む三日間)。古典期には、それはエレウシスの秘儀祭と従属的關係で結ばれていた。ポエードロミオーンの月にエレウシスで秘儀加入儀式を受けようとする人は、最初その七カ月前に行われるアテナイの「アグライで」加入儀式を経験することが求められた。しかし、アグライでの秘儀祭の内容は明らかでない。なぜなら、アグライはエレウシスほどの宗教的畏敬に包まれていなかったとしても、原則的には同じ秘密の規則のもとにあったからである。伝説によれば、この小秘儀祭は最初ヘーラクレスのために制定された。彼はエレウシスで加入儀式を受けることを望んだが、他国人であるために認められなかった。そこで、彼はイリソス川で沐浴し、デーメーターとペルセポネーに伴われて流血の罪を浄める準備的儀式にしたがっ

た。その場面を表した彫刻においては、儀式の補助役はダイドゥコス（松明持ち。秘儀祭をつかさどる神官職の第二の地位）がつとめ、もみ殻を吹き分ける扇（*linon*）が使用されているという。⁽²⁵⁾

また、エラフェーボリア祭（*Elaphebolia*）が、エラフェーボリオンの月の六日に、アルテミス・エラフェーボリオス（*Elaphebolos*＝鹿の射手）のために設けられていた。アルテミスを彼女に捕らわれた牡鹿とともに表現することは、古代の狩猟と結びついた伝統であった。しかし、アテナイでは市域や耕作地の拡大により鹿が山岳地帯へ追いやられ、狩りの対象でなくなったため、この信仰は前四世紀までには少数者の関心事でしかなかった。ただ、パシエ地のこね粉、蜂蜜、胡麻から造られた「エラフォイ」（牡鹿）と呼ばれる菓子を、女神に捧げる慣習はあった。⁽²⁶⁾

また、プロアゴーン祭（*Proagon*）と呼ばれる演劇競技の準備式典が、エラフェーボリオンの月の八日にあった。コレーゴイ（合唱隊奉仕者）は合唱隊や俳優とともに、（ペリクレスの造った）オディオンの中の演壇に上がって、公衆の前に総出を見せた。ディオニューシア祭の実際の演劇のとき——合唱隊や俳優はみな仮面をつけ、舞台衣装を着ていた——と異なり、この宣伝のセレモニーでは、かれらは素顔で普通の着物をきて現われたが、それは観客の要望に沿ったものであったと想定される。

ここで、アスクレピエーア祭（*Asclepieia*）が奇妙な仕方で行なわれていた。アスクレピエーア祭の直前に割り込んでくる。癒しの神アスクレピエーア（*Asclepius*）への供儀は、エラフェーボリオンの月の八日に行なわれた。この祭の詳細は知られていないが、多分、かなりの供儀と共同食事を伴うものであった。アテナイ人は前四二〇／一九年に（これはニキアスの平和によってもたらされた、ペロポネソス戦争の中断の時期である）南ギリシアのエピダウロスから医神アスクレピエーア祭の祭儀を導入した。神はポエードロミオンの月の大秘儀祭の時にアテナイのエレウシニオンへ、彼の娘ヒュギエーア（*Hygieia*、健康の女神）や彼の蛇を伴ってやって来た。それから、アテナイ人はアスクレピエーア祭のための聖所を、ディオニューシス劇場上方の、アクロポリスのより高い斜面にある絶壁の下に（デュオニューシス

の囲い地に隣接して創建した。⁽²⁸⁾ こうして、アスクレーピオスのための二つの例年祭が、ちょうど六カ月の間隔をおいて設定された。一つは神の到来を祝うエピダウリア祭でエレウシスの大秘儀祭期間に挿入され、もう一つはアスクレピエア祭で都市ディオニュシア祭期間に挿入された。

次に、都市ディオニュシア祭 (City Dionysia) はアテナイの最大級の祭の一つであって、エラフェーポリオーンの月の一〇日〜一六日の期間であったと推定される。⁽²⁹⁾ デイオニューソス・エレウテレウス (Eleuthereus) エレウテライに坐す) の古い木彫神像がアテナイに移転されたのは、年代的に確かでないが、おそらく前六世紀後半であろう。⁽³⁰⁾ この神のエレウテライからの到着は、一つの奇妙な儀式によって毎年、永続された。すなわち、その古い木彫神像がアテナイの劇場傍の神殿から除去され、市の城壁の外でポエオティアへの道筋にある——つまり、エレウテライからの転置途上の休憩地にあたる——アカデミアの聖所の小さな神殿へ持って行かれた。神像は幾日間かそこに止められ供儀を受けた。それから多分八日か九日の夕方、それはディオニュシア祭に用いられるの間に合う時間に、アカデミアからふさわしい護衛つきで劇場傍の神殿へと連れ戻された。こうしたことはいわば準備的儀式であった。さて、都市ディオニュシア祭の主要行事の一つは、一〇日に行なわれる行列 (ポンペー) である。それはファロスを伴う儀式であるとともに、供儀の生贄 (牛) を運ぶ行列であり、より小さな規模においてであるが、パンアテーナイア祭の行列に比較されうるものである。——例えば、紫色の衣装を着たメトイコイ (居留外国人) が奉納物を運ぶ「盆運び」 (Skaphophoroi)、様々な服装をした市民たちが革製の葡萄酒のボトルを肩に担ぐ「ボトル運び」 (Askophoroi)、一人の選ばれた高貴な生まれの少女が葡萄酒のみちた金の籠を運ぶ「カネーフォロス」 (Kanephoros)、長くて細い棒のようなパン (obelisk)、等。行列は様々な神殿や休止地点を経由して進み、そうした場所では神々を賛える舞踊が見られた。昼間の行列と供儀に、夜の浮れ騒ぎ (Komos) が続く。牛肉の結構な食事と豊富な葡萄酒を味わってから、男たちは松明にエスコートされ笛とハーブの音楽に伴われて町中へくりだした。

ところで、すでに前六世紀のうちに都市ディオニューシア祭と演劇的パフォーマンスとの間に一つの関係が発達しはじめた。ギリシアの演劇の起源は曖昧であるが、ディオニューソスの崇拜と結びついた合唱隊の歌と舞踊から独創的に進歩を遂げたものと考えられる。悲劇の最初の上演は、伝統的日付によれば前五三四年にテスピス (Thespis) の指導によってなされた。テスピスは合唱隊と対話し、また自分が違った性格の役を演じることができるよう仮面と衣装で着飾った。この個人としての俳優の創作は、しだいに同時に舞台に登場する二人、または三人の俳優へと発達した。また、悲劇は三つの継続的演劇において上演され、それに一つのサチュロス劇が伴った。前五〇九年以降には、ディテュランボス (最初コリントで発明されたディオニューソスを賛えるオード「叙情詩」) が公式に祭に含まれた。最後に、前四八六年には、滑稽な合唱隊と俳優を伴う喜劇が、都市ディオニューシア祭の演劇的プログラムに加えられた。都市ディオニューシア祭のあらゆる組織に責任を負う役人はアルコーンで、彼は毎年三つの異なった部族から各一名ずつ三人の富裕な個人を選び、悲劇競演のためのコレーゴイ (合唱隊奉仕者) とした。彼はまた喜劇のためには五人、ディテュランボスのためには男声合唱隊のために三人、少年の合唱隊のために三人、コレーゴイを選んだ。また、アルコーンは詩人たちの一団を選んで各コレーゴスに割当てた。コレーゴスにとっては、合唱隊のメンバーを選び訓練すること、そして舞台衣装を調達することが、最も時間と費用のかかる仕事であった。演劇アゴーンの審判団の選出には、その評決から情実や賄賂の可能性を排除するための手の込んだ工夫が施されていた。——候補者名のおかれた十の壺が封印され預けられていて、祭の開始のときその各壺から一人ずつ、十人の審判員が抽籤される。競技の終わりにかれらは評価順に詩人の名前を書いたものを壺に投じる。その中からアルコーンが五つの判断を引き出し、その五つの多数決が一般に受け入れられる³¹⁾。

なお、パンディア祭 (Pandia) というゼウスの祭が、エラフェーポリオーンの月の一七日に存在した³²⁾。この日は都市ディオニューシア祭の審理をするエクレーシア (民会) の日の前日にあたる。実際には、この祭は (パンアテーナ

イア祭との類推により)ゼウスの祭なのか、それとも英雄パンディオンの祭なのか、またいかなる祭祀をもっていたのか、何も知られていない。この祭は化石化してしまったアルカイックな過去の残存にすぎない⁽³³⁾。

また、エロースの祭 (Festival of Eros) は、ムーニキオーンの月の四日に行われた。四日はアプロディーテーに捧げられた伝統的な祭日であって、エロースの祭としてもふさわしかった。プロニアア (Pronaia) の発掘によって「庭園 (ケーポイ) に在すアプロディーテー」の聖所から、前五世紀中葉に始まる碑文が発見された。これはエロースの祭の存在した証拠であるが、しかし、その祭式については不明である⁽³⁴⁾。

また、デルフィニオンへの行列 (Procession to the Delphinion) — ヒケテリア祭 (Hiketaria) またはデルフィニア祭 (Delphinia) — は、ムーニキオーンの月の六日に行われた。この祭はアルテミスの誕生日に因むもので、少女たちの行列は嘆願者の小枝 (tektonika) を、イリソス川の土手にある神殿デルフィニオンへ運んだ。この神殿にはアポローンとアルテミスの二柱の神が祀られていたが、とくにアルテミス・ソーテイラ (Sotera || 安泰加護の) への嘆願であると考えられる。嘆願者の小枝とは、アテナイの聖なるオリウの枝に白い羊毛をまいたもので、プルタークの「テーセウス伝」(一八、一) に言及されている。しかし、その最初の儀式はテーセウスとどんな関係もなく、たんに共同体のための一般的嘆願であった。それは婦人たちによって指揮された少女たちの行列なので、多分、女性たちの保護女神としてのアルテミスへの訴えであった⁽³⁵⁾。

また、ムーニキア祭 (Mounychia) がムーニキオーンの月の一六日に行われた。この祭は月の名前となっており、月全体がアルテミス・ムーニキア (|| ムーニキアに坐す) と関連している。この満月の日 (一六日) の祭式は最初、オリュンポス神でアポローンの姉としてのアルテミスのためというよりも、月の女神ヘカテー (Hekate) のためのものであったと考えられる⁽³⁶⁾。アルテミスはヘカテーと同視されるか、あるいはそれに代わって月の女神となったのである。この日、アンフィポンテス (amphiphontes || 周囲を照らす) とよばれる円形の特別の菓子が公的な行列

で運ばれた。また、女神に対する私的な奉納としても、小さな数本のロウソクを円形に刺したケーキが用いられたという。また、アルテミスの聖所のあるムーニュキアの地は、ペイライエウスから少し内陸に位置する険しい丘である。前四九二年にペイライエウスがアテナイの海軍基地として建設されて以来、この港町は人口と富において大きく発展し、ムーニュキア祭も大きな意義を持つようになった。この祭のときに、壮丁たち（エフェーボイ）のレガッタ競技、すなわちペイライエウス港からムーニュキア港まで岬をまわる海のレースが行われた。また、おそらく壮丁たちの海戦・ナウマキア（*naumachia*）も行われた³⁹。もう一つの祭式であるアルテミスへの雌山羊の供儀については、次のような伝説が添えられている。——一頭の雌熊がアルテミス神殿に入ったところ、アテナイ人によって殺された。この行為は女神の怒りを買ひ、疫病がもたらされた。神託は一人の娘がアルテミスに捧げられることを助言し、皆が躊躇していたとき、エンバロス（*Embaros*）という名の男が志願した。彼の条件は、彼とその家系が女神の終身神官職を与えられることであった。彼は自分の娘を捧げるかのごとくにして神殿につれてきて彼女を奥深い聖所に隠し、それから、彼は娘の身代わりに着物や装身具をつけた雌山羊を供儀した。このムーニュキアの伝説は、アルテミス・プラウロニアのそれと比較されるべきものであろう。

次に、オリュンピエイア祭（*Olympiaia*）は、ムーニュキオーンの月の一九日にゼウス・オリュンピオス（*Olympios*＝オリュンポスに坐す）のために行われた。前六世紀後半にペイシストラトスによって、イリソス川の近くにイオニア様式の巨大な神殿が計画された。それはこの時期のエフェソス、サモス、ミレトスの大神殿を真似たスケールのものであったし、そのためにゼウスの祭祀がエリスのオリュンピアから直接輸入されたといわれる。その造営は前五一〇年に僭主政が倒れた後、未完成のまま長期間放置された（一二九年にようやく、ローマ皇帝ハドリアヌスの命により落成）。しかし、多分、その創建を記念して、オリュンピエイア祭は毎年祝われ続けたものと思われる。その日には、ゼウスに対する大規模な牡牛の供儀が行われた。また、プルターク「フォキオン伝」（三七、一）

に描かれているようなアテナイの騎兵隊の参加した行列や、ヒッポドロム（馬術競技場）での「アンティパシア」(Anthipasia)と呼ばれる騎馬隊列の演示が見られた。⁽⁴⁰⁾

また、ヘーパイステイア祭 (Hephaistia) がムーニキオーンの月に行われた（日付は不明である）。アテナイ郊外のアカデメイアの神域にヘーパイストスの祭壇があり、そこからアクロポリスまでの松明競技 (καυράδη πορεία) があったことが知られている。⁽⁴¹⁾ また、多くの国家祭祀では犠牲獣は首を切られるために、体ごと高く持ち上げられて祭壇の上に置かれた（多分もがかないように、木槌の一撃で気絶していたか、ロープで縛られていたのである）が、ヘーパイステイア祭の宴会では、二百人ものアテナイ人が牡牛をつり上げるために選ばれたという。⁽⁴²⁾

注

(21) ユダヤ人にとってそうであったように、ギリシア人にとって、一日は日没とともに始まった。とすれば瓶開きやリムナイへの新酒奉納と、コエスの祭とは、日没をはさんで連続した流れの中にあることになる。cf. Mikalson, op. cit., p.

24. Parke, op. cit., pp. 110-111.

なお、その他に、この二二日と結び付いた二つの祭式が知られている。一つは、オリュンピエイオン付近（周壁内のゲイの神苑）の地面の裂け目で行なわれた死者への奉納——小麦粉、蜂蜜、および水の——である。この祭式はのちに神話のデウカリオンの洪水によって説明され、その裂け目は洪水が終わったとき、水がはけていった割れ目であるとされた。

Pausanias, *Description of Greek*, 1, 18, 7. Loeb, 4 vols. 飯尾都人訳『ギリシア記』、龍溪書舎、一九九一年、三六頁参照。

もう一つは、伝説上、新しい飲物・葡萄酒導入の犠牲者とされるイカリオス (Icarus. イカリア区の名祖) と彼の娘エーリゴネー (Erigone) を、ディオニューソスとともに祀る祭式で、木に人形や仮面を吊ってゆすったり、少女たちがブランコをする慣行があったとされる。Parke, op. cit., p. 118.

(22) Cf. Thucydides, *History of the Peloponnesian War*, 1, 126. Loeb, 4 vols, 1, pp. 210-211. 久保正彰訳『戦史』(上)、岩波書店、一九六六年、一六八頁。ニーチェ『ギリシア人の祭祀』上巻精訳、ニーチェ全集Ⅰ、筑摩書房、一九九四年、四一三頁。なお、エルキア暦によれば、ディアシア祭のための出張供儀（二二ドラクマ相当の羊「のホロコースト」、

内臓が燃焼するまで葡萄酒をこ)は、マテナイの「アマテライで」行われている。

- (23) Thucydies, I, 126. Loeb, pp. 210-211, & note 2 (C. F. Smith)。クセノンのような金持ちの家系は、幾匹かの豚を奉養しつゝだ (Xenophon, *Anabasis*, 7, 8, 4)。Parke, op. cit., p. 121.
- (24) Aristophanes, Loeb, I, pp. 304-305; pp. 344-345. 『ギリシア喜劇』田中美知太郎訳、筑摩書房、一九八六年、二四七頁、二七九頁。
- (25) Parke, op. cit., pp. 123-124. cf. Mikalson, op. cit., pp. 120-121.
- (26) Parke, op. cit., pp. 125.
- (27) Mikalson, op. cit., p. 123, p. 125. (ただし、パークは九日としている。Parke, op. cit., p. 132.)
- (28) アスクレーピオス導入を推進したアテナイ人の一人は劇作家ソフォクレス(当時六十歳代)であったことが知られている。Parke, op. cit., p. 135.
- (29) この祭の期間については、マイカルソンの推定に従う。Mikalson, op. cit., p. 130, p. 137. パークは五世紀には通常四日間、ペロポネソス戦争期には三日間に切り詰められ、クレネム期には付加の日々により延長されたとする。Parke, op. cit., p. 131. 他、Simon, op. cit., p. 102.: "The festival began with dithyrambic choruses of men and boys; on the next day came the comedies; then followed three days of tragedies."
- (30) Pausanias, I, 38, 8. 飯塚訳、七八頁。cf. Pausanias, I, 2, 5. 邦訳、六頁。——この箇所では、祭祀転置と責任のあるエレウテライのペガソス (Pegasos) が、マテナイの初期の神話的王の一人マンピュクテネオン (Amphictyon) と結びつけられたのである。この祭の祭祀協働の事情は、著者が述べたように、著者の著述を補うための潤色と解されている。Parke, op. cit., p. 126.
- (31) Parke, op. cit., p. 132.
- (32) マイカルソンは一七日と推定する。Mikalson, op. cit., p. 137. パークは正確な日付は不確かだが、都市テイオニミア祭の直後、かつ祭の検討のためのエウクレイシムの前日であると述べている。Parke, op. cit., p. 136.
- (33) Parke, *ibid.*。サローネー (Selene, 月神) とザニスの子とセネンティアート (Pandia) の祭び、春の最初の満月を祝う祭びであるという説がある。Noel Robertson, "Athena's Shrines and Festivals," in Jennifer Neils (ed.), *Worshipping Athena: Panathenaia & Parthenon*, The University of Wisconsin Press, 1996, p. 75.
- (34) Parke, op. cit., pp. 141-143.
- (35) Simon, op. cit., p. 79.

- (36) Deubner, op. cit., p. 201. Mikalson, op. cit., p. 140, p. 150.
 (37) Parke, op. cit., p. 137.
 (38) Simon, op. cit., p. 81.
 (39) Parke, op. cit., pp. 138-139 (単なるスポーツの実践、または青年の訓練教程の部分とする)。 Simon, op. cit., pp. 81-82 (サラミス海戦の戦勝記念の意味があるとする)。
 (40) Parke, op. cit., pp. 144-145.
 (41) ヘーパイストスの祭祀は、前六〇〇年頃アテナイが北東エーゲ海沿岸のシゲイオン (Sigaeion) を領有したとき、それを祝って導入されたと想定される。 Richardson, art. cit., p. 64.
 (42) IG I² 84. Parke, op. cit., p. 171 (& p. 52). Simon, op. cit., p. 53.

二 アテナイの夏の祝祭 (年末)

タルゲーリオーンの月の祝祭。——六日と七日、タルゲーリア祭。一九日、ベンディディア祭。二五日、プリュンテリア祭。二六日(または二七日)、カリュンテリア祭。

スキロフォリオーンの月の祝祭。——三日、アレーフォリア祭。一二日、スキラ祭。一四日、ディポリエイア祭(プーフォニア)。下旬(日付不明)、ディイソテリア祭。三〇日、ゼウス・ソーテールへの供儀。

タルゲーリア祭 (Thargelia) は、アポローンの重要な祭祀で、月にその名前を与えたものである。それはタルゲーリオーンの月の六日と七日に行われ、その第一日は浄化の日、第二日は奉納の日であった。デロス島でアルテミスが六日に、その双子の弟アポローンが七日に生まれたと信じられていた。タルゲーリア祭は、イオニア人の多くの諸都市で同一の一般的なやり方で祝賀された。ところで、アテナイおよび他のイオニア諸ポリスで公的祭式のために用いられた浄化方法は、ファルマコス (*pharmakos* = a poisoner, sorcerer) を除去することであった。アテナイでは毎

年二人の男性がファルマコイ (Pharmakoi) に選ばれたが、その資格はかれらが身体的美の観点からして醜く、かつ自発的にそれに同意するほど貧困であることであった。かれらはしばらくの間、国費で養われた。そしてタルゲリア祭の初日に、アテナイ人民のためのスケープゴートとなるために外へ連れ出された。一人は男たちの代役として黒イチジクの首飾りをつけ、もう一人は女たちの代役として白イチジクの首飾りをつけた。都市をまわる行列に連れていかれた後、かれらはイチジクの枝で打たれ、海葱根 (ユリ科の薬草) を投げ付けられ、そして追い払われた。さて、タルゲリア祭の他の主要行事は、七日のアポローンへの初穂奉納——タルゲロス (Thargelos) と呼ばれた——である。あらゆる種類の穀物と野菜を鍋で煮たシチューを、初穂として奉納したのである。この時期はアッティカではまだ穀物収穫の前であるから、それは豊かな実りで来たるべき収穫を祝福するようにという神に対する予備的な訴えであっただろう。このように、少アジアから来たイオニア人の神としてのアポローンには、あらゆる植物の豊穡の神としての側面がある。しかしまた、アテナイではアポローンは文化の神として発展した。タルゲリア祭には、アルコーンの司る音楽競技が催され、コレーゴイ (合唱隊奉仕者) が任じられた⁴³。それは二つの部門 (男性部門と少年部門) に分かれ、それぞれ五つの聖歌隊 (二部族毎にグループ化、五〇人の歌手) が讃歌を歌って競い合うものであった。勝利チームは賞品として鼎 (tripod. 三脚台) を受取り、イリソス川沿いの神殿ピュティオンのアポローンに捧げた⁴⁴。

次に、ベンディディア祭 (Bendidia) は、タルゲリオーンの月の一九日とされた。ペロポネソス戦争開始後まもない前四二九年、トラキア人の女神ベンディス (Bendis) のペイライエウスへの導入が公的に承認された。当時トラキアはアテナイの同盟国であったし、戦略的に大変重要であった。ペイライエウスには二国間貿易の結果として入植したトラキア人の居留地があった。かれらはベンディスのための聖所を創建する権利を与えられ、ムーニキアの丘のアルテミス神殿の傍に神殿が建てられた。ベンディスはフリギア風の帽子をかぶりブーツをはき、外套が肩から短

いドレスにかかった姿で描かれ、右手に長い槍を持っている。狩人としての姿で示されたこの女神は月神でもあり、アルテミスとほぼ同等視された。ベンディス導入について、アテナイ人は戦争でデルフォイの神託を受けることが困難であるため、ドドナのゼウスの神託を伺って好ましい回答を得ていた。このベンディディアの最初の祭の模様は、プラトンの『国家』冒頭に記されている⁽⁴⁵⁾。ベンディスのアテナイ人崇拜者の行列はアテナイのプリュタネイオンを出発してペイライエウスの聖所へ向かい、トラキア人の行列はペイライエウス自体から出発してそこへ向かった。夕方には馬に乗った松明リレー競走があったし、夜通しの祭もあった⁽⁴⁶⁾。

また、プリュンテーリア祭 (Plynteria) は、タルゲリーオーンの月の二五日に行われた。アテーナー・ポリアス (Polias II 都城鎮護の) 像は古い木彫神像 (xoxaon) であって⁽⁴⁷⁾、アテナイ人はこの日、木彫神像に対して沐浴洗淨の祭事を行った。その祭事は神像に礼服を着せることを伝統的に委ねられている家系プラクシエルギダイ (Praxiergidai) が執り行った⁽⁴⁸⁾。アテーナー神像の洗淨と衣替えの儀式は、婦人たちにとって大きな威厳のある秘密の儀式として取り扱われた——それは無頓着な男性や伝授を受けていない女性に開かれるべきでなかった。その儀式の手順は、1、神像から装身具を取り除き衣装を脱がせること、2、裸になった神像にヴェールをかけること、3、衣装の洗濯、4、神像の沐浴、5、神像に再び衣装を着せ装身具をつけることである。このような手の込んだ儀式的洗淨は、アテーナー女神——とくに共同体の守護神である、城砦の上にある女神像——に特有のものである。他の神々の像はさまざまな仕方で大切にされ礼拝を受けるが、しかし洗濯や飾り付けが一つの全体的な祭をなすことはない。アテナイにおけるこの洗淨の祭は二つの段階、すなわちプリュンテーリア (Πλυντήρια: 洗濯の祭事) とカリュンテーリア (Καλυπτήρια: 装飾の祭事) からなっていた⁽⁴⁹⁾。神話において、アテーナーがアクロポリスの丘に植えたオリーブの木の証言者とされる王ケクロプスは、アグラウロスを娶り、またその三王女の一人もアグラウロスと言った。このアグラウロス (Aglauros) の名は、最近の解釈では祭事と関係づけられ、彼女は洗濯と沐浴のための「澄

んだ水」を擬人化しているとされる。また、祭事において神像に専心する二人一組の少女たち——「洗濯係」(plyntrides)と「沐浴係」(loutrides)の存在が知られている⁽⁸⁰⁾。

アテーナー・ポリアスのための洗浄の祭事は、アクロポリスの北側中央に位置する「旧神殿(ナオス)⁽⁸¹⁾」、またはその同じ場所に立てられた「イオニア式神殿」自体のなかで行われたと推定される。この「イオニア式神殿」はニキアスの平和で知られる前四二一年頃着工され、前四〇六／五年頃完成した。しかし、前三三五／四年頃のパンアテーナイア祭の法令碑文(IG II² 334)に見られるように、一般に「旧神殿」とも呼ばれていた⁽⁸²⁾。中央の壁で仕切られそれぞれ東と西を向く二室があり、西向きの室は北と南にポーチをもつ。広い方の六本の柱に囲まれた北側ポーチには、前四〇九／八年の建築記録の碑文(IG I² 474)によれば、テュエク羅斯の祭壇(altaar of thyéchoos)がある⁽⁸³⁾。また南側ポーチは、六柱の優雅な女人像柱(caryatids)で飾られている。N・ロバートソンの説では、この二つのポーチを備えた西向きの室がアテーナー・ポリアスの神室(ナオス)であり、東向きの室は奉納品のためのものである⁽⁸⁴⁾。また西向きの室の前室からは四本の小コラムを通して庭のオリーブの木が見え、その先にパンドロセイオン、ケクロピオンがある。さて、プリュンテéria祭は一般人の目を離れた特別な聖職者だけの秘密の祭事である。神殿の北側ポーチは適切にも奥へ退いているし、洗濯と沐浴にあつらえ向きの場所を提供する。それは十分な広さをもち、また一隅に祭壇を備えている。洗浄の祭事はアテーナー神像に向けられた主要な伝統的儀式であるので、それは当初から神殿の位置やその不均斉な特殊構造を決めたと考えられる。また、北側ポーチから少し西(四〇メートルと五五メートル離れたところ)に二組の階段が発見されており、祭事の水を得るために、直接アクロポリスの北側の麓にある泉へおりていく小道が確かめられている。その一つは隠れた井戸へ、もう一つはパンとアポローンの洞窟へ達している。その少し先にはクレプシユドラの泉(Klepsydra)があるが、この泉の水は後代のアントニウスの頃にも入手可能であったし、聖なる水とされていた⁽⁸⁵⁾。少女たちは洗浄の祭事のためにアクロポリスの麓から水を汲んできたに違い

ないし、神殿南側ポーチのアーキトレーヴを頭上に載せた六柱の女人像柱（カリュアティデス）を、プリュンテリア祭のための水瓶を運ぶ品位ある少女たちとして見ることも可能であろう。（なお、アクロポリス北斜面の発掘から、ヒュードリアのような首部と注ぎ口をもつ特異な形のオイノコエーが出土している。みな前四一〇年頃、同じ工房で作られたアテーナーを描いた壺である。⁵⁶）

ところで、このプリュンテリア祭の日は、またたいそう不吉な日であるとされていた。その日は都市の聖所が至る所で閉ざされていた。これはアンテステーリオンの月の「鍋の日」と同様の慣行であって、邪悪な霊が出回ると想定されたことを示唆している。その理由は、一般にはアテーナー・ポリアスの不在（または彼女が他のことに気を取られていること）に帰されており、女神の加護がない限りどんなことをなすのも賢明でないと考えられた。⁵⁷ プリュンテリア祭における木彫神像の洗浄は衛生上の行為である以上に、神像の力の再生のための行為であると解され、アテーナー女神の到来がイメージされた。⁵⁸

次に、カリュンテリア祭（Kallynteria）は、タルゲーリオンの月の二六日（または二七日）に行われた。⁵⁹ プリュンテリア祭の一日か二日後、洗濯した衣装が乾いたとき、アテーナー女神像はヴェールをとられて沐浴し、油を塗るか、多少ペイントをほどこされ、それから再び衣装を着せられ、装身具をつけられた。したがって、この祭はプラクシエルギダイによる秘密の儀式をとまなう、アテーナー女神像の装飾の祭である。⁶⁰ 神像の装飾「コスモス」（*kosmos*）は主に衣装であるが、黄金の冠（*ostéanos*）や首飾りをつけることも含まれている。カリュンテリア祭の日はまた、アテーナー・ポリアスの傍らに常に灯っている有名なランプが、オリーヴ油で再び満たされて再点火された、年に一度の日であったらう。⁶¹

次に、アレーフォリア祭（Arrephoria）はスキロフォリオンの月の三日に行われたと想定される。⁶² この祭についてパウサニアスは自分を「非常に驚嘆させた行事」であるとしつつ、次のように書いているが、祭の行われた月日

を特定していない。——二人の少女がポリアスの神殿のすぐ近くで寝起きしていて、アテネの人びとは彼女らのことを『聖秘物運び』（アレフォロイ）と呼んでいる。彼女らはある期間を女神のもとで過ごし、祭礼当日がやってくると、夜中につきぎのような役を演ずる。アテーナーの女神官の授けるものを頭に載せて運ぶのだが、授ける側の女神官も自分の授けるものが何かを知らず、運び役の少女たちにも分かっていない。……囲壁をくぐって天然の地下道が下に通じているのだが、実はこの道を少女らは降りていくのだ。彼女らは運んできたものをそのまま置き去りにして、代わりに何か包み隠されたものを受け取って持ち帰る。そこまで彼女らはお役ごめんとなり、人びとはこれと交代に別の少女たちをアクロポリスに導いていく。⁽⁸⁵⁾ オスカー・プロニアは一九三〇年代の発掘調査によって、アクロポリスの北壁（旧神殿の東側）に地下通路を発見した。⁽⁸⁶⁾ それは岩の間を通過して下降し、アプロディーテーとエロースに捧げられた野外の聖所にまで続いていた。これは明らかにアレフォロイがその秘儀的使命を帯びて夜間に旅行した道筋であった。その全ての手続き——秘密の伝達、夜中の行事、女性のみ神事——は、それが魔術的豊穡祭式であったことを示している。大人でなく小さな少女を選んだことは、多分、子供は祭式的に純粹であって儀式の効果を覆すことが少ないという信念によって決められていた。⁽⁸⁶⁾ この儀式において、アクロポリス上のアテーナー女神は、その召使を介して崖のすぐ下にその聖所のあるアプロディーテーと結合されていた。それは「庭園（ケーポイ）に在すアプロディーテー」、植物の生長と豊穡を司る神性としてのアプロディーテーであった。この祭は原初的時期にアテーナーがまだあらゆる一般的な役割を担う共同体の女神であって、戦争・手芸のみならず、植物の豊穡とも関係していた時期に始まったと想定される。また、それはおそらく聖なるオリイヴ樹の崇拜から出ている。⁽⁸⁶⁾ 神話によれば、ケクロプスの三王女はアテーナー女神に仕え、その三人のうち、パンドロス、ヘルセーの名は「露にみちたる」「露」の意で、露の姉妹（dew-sisters）といわれる。それゆえ、この祭をアテーナーが最初に植えたアクロポリス上のオリイヴの木と関連づけ、一般にオリイヴの豊穡を願う祭式とする解釈がある（オリイヴの収穫は晩秋か冬であるが、

この夏の時期の露が果実の大小にとって決定的な作用をするから⁽⁸⁷⁾。

次に、スキラ祭 (Σκίρα, Skira) は、スキロフォリオンの月の一二日に行われた。この祭はスキロフォリア祭 (Skirphoria) とも呼ばれ、このアッティカ暦の最後の月の名称の由来ともなっている。しかし、一二日がアテナーの祭日なのか、デーメーターの祭日なのかについては、すでに古代において不一致が見られ、近代の研究者の間でも見解が分かれるところである。実際のところ、この日に両神への幾つかの祭事が同時に並行的に行われている。その際、どちらの女神の祭式も豊穣を促進するという同一の一般的目的に使っていた。それらの祭式とは、(1) 専ら婦人たちによって行われた秘儀的祭式があり、彼女らはおそらく別々にテスモフォリオンに集まり、デーメーターのために仔豚を穴に投じた。また(2) アテナイのアクロポリスから郊外のスキーン (Μεττόν) まで、アテナーの女性神官ら都市の神官職の主要メンバー幾人かが、スキロン (Βαϊόων) とよばれる白い大きな日傘 (天蓋) に覆われて出掛けていき、その地で何らかの祭事を行った。さらに(3) アテナイのディオニューソスの聖所 (おそらくリムナイの) から、パレロンにあるアテナー・スキラス (Μεττόν) の神殿までのコースを、葡萄の木の枝を運びつつ走る青年たちの競技があった⁽⁸⁸⁾。以上のように、スキラ祭は秘儀、行列、競走を含む複合的な祭式を一つの祭のうちに結合していた。

そのうち第一のものについては、アリストパネスの作品に偶然的な暗示がある。『女だけの祭』の一節では、国家にとって役立つ人間、隊長や將軍を生んだ女性はステーニア祭やスキラ祭で上座を占めるべきであるとされる。また『女の議会』の冒頭では、スキラ祭の折りに女性たちだけで話し合い、彼女らが男装して民会に出席し政治を乗っ取る計画を立てたことになっている⁽⁸⁹⁾。また、仔豚をテスモフォリオンの地下の「室」(νεράρον) に投入することは、豊穣神デーメーターへの典型的な供儀であり、後にこの祭式の説明のために豚飼いエウブルーウスがペルセポネーの略奪の際に一緒に「割れ目」に飲み込まれたという神話が作られた⁽⁹⁰⁾。第二の祭式については、注意深い辞書編集者

ハルポクラティオン (Valerius Harpocration, of Alexandria. 年代不詳) によるスキラ祭の説明に次のようにある。——「アテナイにおける月や祭について書いてきた人々(その中の一人はリュシマキデス [Lysimachides. アウグストゥス時代の作家] である)は、スキロンとは大きな日傘であるという。それが運ばれるとき、それに覆われて、アテーナーの女性神官、ポセイドーンの神官、およびヘーリオスの神官が、アクロポリスからスキロンと呼ばれる場所まで歩いた。エテオプターダイ (Ethebutadai) がそれを運んだ。……」スキロンの場所は不明であるが、アテナイのディピュロン門をでてエレウシス街道に沿って進み、ケフィソス川の渡しの前あたりであるとすれば、アテナイからおよそ三マイル (4.8km) のところである。⁽⁷²⁾ 日傘は暑い日照りの日の徒歩旅行という実際的な目的から用いられたのであろうが、やがて威厳のある印象的なもの——少なくとも四人の随行員がその支柱を運ぶ大きな天蓋——へと発展させられた。アテナイの「エレクティオン」⁽⁷³⁾ における最古の祭祀の女性神官と神官、それに古い誓約の神ヘーリオスの神官は、プターダイ家に属していた。⁽⁷⁴⁾ スキロンでの祭事も不明であるが、この時期は麦の収穫期であるので、おそらく一般的な意味での作物成熟の祝福、あるいは聖なる穀物の形式的な収穫儀礼であったと思われる。⁽⁷⁵⁾ また、第三の競走については、あるヘレニズム期の註釈者によれば、ピュアノプシオンの月のオスコフォリア祭にアテナイからパレロンまで葡萄の房つきの葡萄の木を枝を運ぶ行列があったが、その行列と同じコースを葡萄の枝をもって走る競走がスキラ祭の日に行われた。(秋のオスコフォリア祭が葡萄の収穫の時期に当たるとすれば、夏のスキラ祭は葡萄の最初の枝の剪定の時期に当たっていた。) 各部族から選ばれた青年たちが参加し、その数は一〇人または一〇の倍数であり、勝利者はペンタプロア (pentaploa) とよばれる五つの成分——葡萄酒、蜂蜜、チーズ、それに少しの穀物とオリヴ油——を含む飲物を与えられた。それは女神アテーナー・スキラスに対する、あらゆる果実の献酒であって、勝利者はそれを女神と分かちもつことを許された。⁽⁷⁶⁾

次に、ディポリエエア祭 (Dipolieia) は、スキロフォリオンの月の一四日に行われた。これはアクロポリスの

上に祭壇をもつゼウス・ポリエウスのための祭であって、極めて特異な「ブーフォニア」(Bouphonia)の儀式が催されたことで知られる。ブーフォニアという言葉は「牛」(bos) + 「人殺し」(phonia)で、人間殺しに使用される語が不吉にも動物殺しに適用されている。そして、雙刃の斧(henkel)が牡牛殺害のかどで裁判にかけられるのである。パウサニアはこの祭式縁起の伝承は筆にしないとしつつ、その仕来りについて次のように記している。――

「先ず、ゼウス・ポリエウスの祭壇に小麦と混ぜ合わせた大麦を供えて、見張りは一切つけないでおく。つぎに、犠牲のための身支度が整えられたまま囲われていた牡牛が、祭壇に近寄って播種用の麦に口をつける。すると、人びとは神官の誰かひとりのことを『ブーフォノス(牛を屠る者)』と呼んで囃したて、へ当の者は牡牛を屠殺してからその場に斧を投げ出して――そうするのが彼のきまり――逃げ去ってしまう。ところが人びとは屠殺行為を演じた男などまるで見なかったかのように、その斧を裁判にかけるのだ。」⁽⁷⁷⁾同じくパウサニアは、アテナイの諸法廷を説明する際に、エン・プリユタネイオンと呼ばれる法廷で鉄器や無生物に対する裁判が開かれることを紹介しつつ、こう書いている。――「エレクテウスがアテナイの王だったとき、初めて『ブーフォノス』がゼウス・ポリエウスの祭壇で牛を屠殺した。彼はその場で斧を残して、国から立ち去ってしまうが、斧の方は審判を受けて、直ちに無罪放免になったという故事があるわけで、いまでも毎年、斧の審判が行なわれている。」⁽⁷⁸⁾ブーフォニアは、前五世紀後半にはすでに古色蒼然たる時代遅れの儀式となっていたことは、アリストパネスの『雲』のなかの例示から知られる(Nephele, 983⁽⁷⁹⁾)。しかし、アクロポリス上のゼウス・ポリエウスに対する牡牛の奉納が、通常の供儀式のルーティーンと異なり、道徳的な含みを伴う事件と見なされ、裁判の形式を伴ったのはどうしてか、という問題がある。斧のよくな無生物を裁くこと自体は――現代のわれわれから見ても異常な司法手続きであるとしても――厳密に古代のアテナイ法の諸原則に一致したものであり、プラトンの『法律』(IX, 873 E - 874 A)もそれを認めている。また例えば、アエスキネス(Aeschines)は陪審員に次のように演説している。――「木、石、そして鉄は、声も理性も持たないけ

れども、もしそれらが人間の上に落ちて人間を殺害するならば、それらは国境の外へ追放される⁽⁸⁾。他方、供儀における牡牛の屠殺が罪あるものとして裁かれる理由は何なのか。パウサニアスに知られていた伝説では、エレクテウス王のときに初めて牡牛の供儀と雙刃の斧の審判が行われ、それを記念して毎年この行事が繰り返されているというものである。この説明には、流血の供儀が最初の祭式であったのではなく、原初の時代の無垢にして単純な祭式の存在が含意されている。それとは別のアクロポリスの神話によれば、アテーナーとポセイドンのアッティカ領有争い⁽⁹⁾のとき、アテーナーはゼウスの支持を求め、その返礼に最初の犠牲はポリエウスとしての彼の祭壇で捧げられることを約束した。こうしてゼウスの祭壇が設けられたというものである。ミュケーナイの宮殿の女神としてのアテーナーはそのライバルにポセイドンがいたかもしれないが、ゼウスの先行者であった。ゼウスとアテーナーのおそらく衝突する要求は、彼女が神々の王ゼウスの前頭部から直接完成された姿で飛び出してきたという特別な関係の承認によって調停された。また、ゼウスに捧げられた牛が普通に飼われている群れからの一頭でなく、犁を引き農業の仕事に従事する牛——農夫の伴侶として特別な愛着をもたれていた「犁牛」——の意義を帯びていたことが大切である。プーフォニアは収穫の時期に行なわれるが、それは牡牛の労働の終わりであり、また神への特別な奉納を必要とする時期でもあった。選ばれた牡牛が聖なる穀物を食べることによって、その屠殺に同意したことに擬せられたにしても、犁牛殺しの罪の感情が残り、それを斧に責任転嫁する儀礼が行なわれたと解される⁽¹⁰⁾。

次に、ディイソテリア祭 (Disoteria) が、スキロフォリオンの月の下旬 (日付不明) にペイライエウスで催された。このゼウス・ソーテール (Soterion 安泰加護の) の祭は、前四九二年のペイライエウス建設より古くなかったと想定され、他のより近年に創設された祭祀についてと同様にアルコーンの管理下にあった。救助者・救い主 (soterion) という称号は、特別な場合に神名に添えられるものなので、ペルシア戦争後、敵の手からアテナイの港を取り戻したときに、その最初の基礎づけがなされたかもしれない (サラミスの海戦は前四八〇年)。列柱をそなえたゼウス・ソー

テールの神殿はペイライエウスの主要な聖所であり、そこではアテーナー・ソーテイラ (Sotaira) の崇拜も行われた。聖なる籠を運ぶ一人の少女を伴う、市街地を通る行列があり、また少なくともヘレニズム期には、エフェーボイによるレガッタ競技が催された。ゼウス、アテーナー、それにペイライエウスで崇拜されている他の神々(アスクレーピオスを含む)に対する供儀が行われ、神々の宴会のための寝イスや食卓が供えられた。前四世紀には、牡牛の大量の供儀が見られ、ペイライエウスにおける例年祭の最大のものとして描くことができる。⁽⁸²⁾

また、ゼウス・ソーテールへの供儀 (Sotira) が、スキロフォリオーンの月の三〇日、アッティカ暦の一年の最後の日に開催される「民会に先立って」アゴラで行われた。パシレウスに導かれて、アルコーンたちや評議会のメンバーが参加し、リュシアスによれば「父祖の供儀」であるこの儀式を執り行った。その目的は、新しいアルコーンたちと新しい評議会が就任する新年への導入的奉仕を行うことであり、主に職務を離れたり、職務に就いたりする役人たちに関係する行事であった。⁽⁸³⁾ また、それは過ぎし一年を通しての、国家の保存に対する神々への感謝であると同時に、これから始まるうとしている年における神々の保護を求める哀願であった。ここでもゼウス・ソーテールはアテーナー・ソーテイラと結びついていた。この儀式は古い年の終わりと新年の始めを特色づける、アテナイの唯一の祭式であった。なお、ギリシア人は年の経過に月の経過以上の注意を払わなかったから、私的な行事としても年末、年始に特別なことをしなかった。⁽⁸⁴⁾

注

- (43) *Attikaion Politeia*, LVI, 3. Loeb, p. 153. 邦訳、九四頁。
 (44) Parke, op. cit., pp. 146-148. cf. Simon, op. cit., pp. 75-76.
 (45) Plato, *Politeia*, 327 A-328 B. Loeb, pp. 1-7. cf. *ibid.*, p. viii, note f (P. Shorey). プラトン全集十一、藤沼令夫訳、岩波書店、二二―二四頁。
 (46) Parke, op. cit., pp. 149-152.

- (47) Pausanias, I, 26, 6 (*'araxua*). cf. Apollodorus, *Bibliothēke*, III, 14, 6. ニーネ^ニ前掲^ニ四五二—四五三頁。Robertson, art. cit., p. 29. Simon, op. cit., pp. 47-49: "The cult statue was a (probably) seated Athena without weapons. It was carved of olive wood and wore real clothes and jewelry: the head was adorned with a high *stephane* (crown) of gold. We know its appearance from inscriptions on black-figure vases and from a large series of late archaic terracottas found on the Acropolis. Some of them have a *gorgoneion* painted on the breast and thus the interpretation is certain."
- (48) 「タルゲーリオーンの二十五日にプラクシエルギダイが秘密の儀式を行ない、女神の衣装を脱がせてその像を覆う」(Plutarch, *Alcibiades*, 34)° *The Parallel Lives*, Loeb, II vols. 『プラターク英雄伝』河野与一訳、岩波書店、全一冊、三—三八頁。
- (49) Robertson, art. cit., pp. 48-49. cf. Parke, op. cit., pp. 152-153. アテーナー女神の洗浄の祭は、アッティカの他の所やギリシアの他の地方にも存在した。トリコス区とエルキア区は各自のプリュンテéria祭をもっていた。トリコス区の祭暦ではプリュンテériaの名がスキロフォリオンの月(たぶん初旬)に記されているし、エルキア区の祭暦では祭名はないが同じ月の三日に行なわれたと考えられる。このどちらの場合にも、アテーナーはアグラウロスとともに供犠を受けている。また、エーゲ海のイオニア人の島イオス(Ios)・パロス(Paros)・タンス(Thasos)・キオス(Chios)は、洗浄の祭に由来する月各プリュンテéria(Plynterion)を、アッティカではその月がアッティカ暦のスキロフォリオーンの月にあたる。cf. Robertson, art. cit., p. 49, p. 51.
- (50) Apollodorus, III, 14, 2. 高津春繁訳『ギリシア神話』岩波書店、一九五三年、一六五頁。Robertson, art. cit., p. 51, & p. 72, note 74. —アテーナーの女性神官としてのアグラウロスは、神々に装飾した最初の人であった。彼女の死後一年間、衣装は洗濯されず、そのからプリュンテéria祭が生じた(Photios s. v. *Kallynteria kai plynteria*)°。
- (51) 前四八五—四年のヘカトンペイドン神文においてネキース(*νεώς*)と書かれたこと。Robertson, art. cit., p. 34. *De Arce Atheniensium*, IG I³ 4 (A, line 16; B, lines 9 & 10).
- (52) *Decretum Atticum de Panathenaeis* c. a. 335/4, IG II² 334 (line 10: *ἀρ[χ]αίαι νεώς*). W. Dittenberger, *Syllage Inscriptionum Graecarum*, 3d ed., 271, 1960, vol. I, p. 480.
- (53) *Curatorum Recensus de Templi et Membrorum Condicione*, IG I³ 474 (line 79: *τὴν βομῶν τῶ θ[ε]ῶν*, & line 202). cf. Robertson, art. cit., pp. 32-33 (「ト^ニヘ^ニーン^ニを^ニwatcher of the burnt offering, or seer^ニと^ニ呼^ニぶ^ニ」)°。Jeffrey M. Hurwit, *The Athenian Acropolis*, Cambridge University Press, 1999, p. 204 (「*τὴν βομῶν* Pouter of Offerings

- とする)。
- (54) この神殿は今日通称(誤って)「エレクテイオン」と言われている。Robertson, art. cit., pp. 31-32. また、基本的に従来の説を継承する解釈として、cf. Hurwit, op. cit., pp. 200-209.
- (55) Plutarch, Antony, 34, 1. 邦訳(十一)一〇八頁。Aristophanes, *The Birds*, 1695; Loeb, II, p. 284. Robertson, art. cit., p. 33. それゆえ、神像の沐浴についての、次のような従来の説は訂正されなければならないだろう。——当日早朝、先ず神像は衣服と装身具を取除かれ、包装された。それから浄化の入浴のために海へ運ばれた。一般にギリシア人は流水の浄化作用を重んじたが、この時期のアッティカの川はケフィソスもイリソスも水量を減じて細流となつたはずであり、それに比して塩水の海は最も確実な浄化作用をもつものと見なされた。アテーナーの神像は包装され公衆から隠された形で、行列をなしてパレロンへ運ばれる習わしだった。前四世紀には、それはエフェーボイ(軍事訓練中の若者たち)による護送を伴う儀式的パレードであった。行列はイチジクの砂糖菓子を入れた籠をもつ婦人によって率いられていた(ピクニックに際し女神の気晴らしのための茶菓か)。海へ到着したとき、包装は解かれ神像は入浴係または洗濯係と呼ばれる二人の若い婦人によって洗浄された。夕方になって再び包装された神像は、エフェーボイの持つ松明の明かりに照らされて行列をなして帰還した。Parke, op. cit., pp. 153-154. cf. Deubner, op. cit., p. 17-22. Simon, op. cit., p. 48.
- ロバートソンによれば、海岸へ運ばれたのはアクロポリスの神像でなく、アテナイ南東部のパラディオン像(Palladion)であった。それは神像の入浴が目的なのでなく、砂の平洲のヒッポドロムで行なわれるアテナイ海軍の模擬戦闘をその像の前で展開するためであった。パラディオン像はスペクタクルを楽しんだし、魔術的に再び力を強化された。このことは劇場におけるディオニューソスと同様であって、パラス・アテーナーの護送とディオニューソスの護送という二つの儀式は、エフェーボイの碑文と一緒に記載されている。Robertson, art. cit., p. 72, note 77.
- (56) Robertson, art. cit., p. 34.
- (57) Parke, op. cit., pp. 154-155. フェンテリア祭が不吉な日と考えられたことを示す事例に次のようなことがある。——前四〇八年にアルキビアデスが七年間の亡命の後、ついに勝利した將軍として祖国に戻ってきたとき、彼はたまたまフェンテリア祭の日にペイライエウスに到着した。「ある人々はそれを彼のために都市のためにもよくない前兆であると解した。なぜなら、いかなるアテナイ人もその日には敢えてどんな重要な仕事にも手を触れないだろうから」(Xenophon, *Hellenica*, 1, 4, 12)。この日、女神の像は衣替えのために覆われている。「そこからアテナイの人々はこの日を大凶の日のうちに数えている。そこでこの女神はアルキビアデスを迎えることを喜ばず、顔を隠して近づけなかったの

だと思われた」(Plutarch, Alcibiades, 34)。当座はアルキビアデスは波頭の上のっているようであったが、しかし数カ月以内に彼の計画は挫折し、彼は決してその地位を回復しえなかった。

- (28) Deubner, op. cit., p. 22. Robertson, art. cit., p. 31: "The image was cherished with magic rites at the turning of the year...", & p. 35: "They [the painted scenes] might illustrate the cleansing festival, if this renewal of the image were imagined as the advent of the goddess."
- (29) Robertson, art. cit., p. 49 (二十六日から二十日)。cf. Mikalson, op. cit., p. 164 (二十四日から二十八日の間)。
- (30) 従来の説では、この祭はマテナー・ポリマスの神殿の春季大清掃——掃いたり磨いたりして美化する——の機会であるけれど、日付がポリマテナー祭の前とされていた。Parke, op. cit., p. 152. Deubner, op. cit., p. 17 ff. Simon, op. cit., p. 46.
- (31) 旧神殿の場所に「イオニア式神殿」が再建されたとき、アテナイの彫刻家・金属職人カリマコス(Callimachus)が黄金のランプを作った。それはキプロス産の丈夫な灯心を使い、十二カ月間昼夜燃えるのに十分な油を保つことができた。ランプの真上に屋根まで届くブロンズ製のナツメヤシの樹があつて、煙を上方に吸い上げる工夫があつた。油は毎年、同じ日に補充された。Pausanias, 26, 7. 馬場恵三訳『ギリシア案内記』上、岩波書店、一九九一年、一二五頁。
- (32) Mikalson, op. cit., p. 167: "The evidence does suggest strongly that the state Arphoria are to be dated to Skirophorion 3, but it is not conclusive." cf. Parke, op. cit., p. 142 (The date... is not at all clear). Simon, op. cit., p. 39 (the exact date is not known).
- (33) Pausanias, I, 27, 3. 馬場恵三、一七—二七頁。
- (34) Oscar Broneer, "Excavations on the North Slope of the Acropolis in Athens," *Hesperia*, 2, 1933, pp. 329-417. Simon, op. cit., pp. 40-41. Parke, op. cit., pp. 141-142.
- (35) アレーフォロイは名門の出の七歳から十一歳までの少女たちの中から、毎年四人、選ばれた。また彼女らのうちの二人は、カルケイア祭(ピュアノプシオンの月の三〇日)にアテナーの衣装(ペプロス)を織り始める儀式に参加した。Parke, op. cit., p. 141. なお、若い女性がその成長段階に応じて演じた宗教的祭典における四つの役割を、アリストパネスは『女の平和』に興味深く描いている。——「七つになって、すぐさまにわたしは聖函棒持の童女の役」[アレーフォロス]次に十では、聖白を女神さまのために挽く役目「アレトリス」、それから次にブラウドニアのお祭りに、黄色い衣の熊乙女「アルクトス」、ついで見事な乙女になって、無花果の飾り頸にかけ、聖籠棒持の晴れの役「カネーフォロス」。Aristophanes, *Lysistrata*, 641-648; Loeb, III, p. 66. 『ギリシア喜劇II』高津春繁訳、一六八頁(ただし、「」内は

筆者の挿入。

(66) Parke, op. cit., p. 142. シュージ・トムソン『ギリシア古代社会研究——先史時代のエーゲ海——』上、池田薫訳、岩波書店、一九五四年、二五三頁。「その蛇と聖木オリヴ、その地下の *sacra* 「聖物」を運び彼女のためにボール遊びをするところの、露にちなんでも名づけられたその処女僧たちをみれば、先史時代のアテーナーはミノアの母性神とほとんど区別することができない」(同書、二五八頁)。また、アレーフォリア祭とテスモフォリア祭との平行関係の指摘、それぞれのうちに同一の原初的祭式の、異なった発展を見る解釈がある。アレーフォリア祭は、エレーフォリア祭 (Errephoria) とか、エルセーフォリア祭 (Ersephoria) と呼ばれたらしく、後者の場合はたしかに「露を運ぶ」の意になる。 Nilsson, *Geschichte der griechischen Religion*, 2nd ed., vol. I, p. 441. Parke, *ibid.*

(67) Simon, op. cit., p. 45. Deubner, op. cit., p. 14. なお、パウサニアスはアテナイ王エリクトニオスの神話(蛇子)について、次のように記している。——「伝承によると、このアグラウロスと彼女の姉妹のヘルセとパンドロスはアテーナー女神が、エリクトニオスを中心に詰めた箱を授け、付託されたものについていたずらな好奇心を働かせないよう警告した。パンドロスはその言葉にしたがったが、ふたりの姉妹のほうはいかんせん箱を開けてしまったものだから、エリストニオスの姿を見てたちまち狂気に襲われ、アトロポリスのもとを切り立った場所から身を投げたという」(Pausanias, I, 18, 2. 要約略「エ」八四頁)。cf. Ian Jenkins, *The Parthenon Frieze*, British Museum Press, 1994, pp. 41-42: "Although he was born of the Earth, therefore, Erichthonius was also a child of Athena and Hephaestus. ... (The derivation of his name is usually given as *erion*, wool, and *chthon*, the earth.)... Pandora is forged by *sober techne*, the craftsman's skill; Erichthonius, by contrast, is the child of passion." Robertson, art. cit., p. 62: "the name Erichthonios, "He-of-the-very-earth" (*eri-*, *chthōn*), suits a snake no less than the name Kekrops; for snakes come out of the earth, or are sought in underground passages. Thus the story like the ritual forges a link between the father snake on the Acropolis, Kekrops, and the infant snake in southeast Athens, Erichthonios."

(68) Parke, op. cit., p. 161.

(69) Aristophanes, *Thesmophoriazousai*, 832; *Ekklesiazousai*, 18. Loeb, 3 vols, III, pp. 204-205; pp. 250-251. 『ギリシアの神話』「イヤク」四三〇頁。

(70) Deubner, op. cit., p. 40 ff. Parke, op. cit., p. 159 (scholion to Lucian). cf. Simon, op. cit., pp. 19-20.

(71) Harpocration s. v. Σκίρην, *Die Fragmente der Griechischen Historiker*, ed., Felix Jacoby, 366 F 3. Parke, op.

cit., p. 157.

(72) Parke, op. cit., p. 157. スキーロンの地は、かつてアテナイとエレウシスの戦争のとき、ドドナの預言者スキエロス (Σκίρρος) が落命した場所であって、彼は水勢はげしい川のはとりに葬られた。地名はこの英雄に因むものであるという。アテナイからエレウシスへ向かう聖道に沿ったこの近辺には、ケフィソス川の手前にラキアダイ区があり、そこに西風ゼフェウスの祭壇や、デーメーターとコレーの神域(両神と並んでアテーナーとポセイドーンが祀ってある)や英雄フュタロスの墓(デーメーターからイチジクをもらったという)がある。そして川を渡ると、ゼウス・メイリキオスの古い祭壇(テーセウスが汚れを浄めたという)がある。Pausanias, I, 5, 36-37. 飯尾訳、七四―七六頁。

(73) そのアクロポリス上の位置について、最近のロバートソンの研究は「エレクテイオン」がアクロポリスの東端にあり、古いアテナイの中心部・南東地区の上方に聳えていたとする。また、その建物 (oikema) の屋根は、吹抜けであった。Robertson, art. cit., pp. 37-44. cf. Hurwit, op. cit., pp. 188-189. パウサニアスの記述では、その入口前にゼウス・ヒュパトスの祭壇があり、「エレクテイオン」内に入ると、最初の室にはポセイドーン・エレクテウス、プーテース、ヘーパイストスのための三基の祭壇が並ぶ。また内側の第二室には海水を入れた水盤があり、南風が吹くと波音を響かせる。Pausanias I, 26, 5. 飯尾訳、五二頁。

(74) ヘーリオスは天体としての太陽の擬人化であるが、ギリシアでは彼の崇拜はほとんどなかった。ただし、例外的にロドス島では主神であった(高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』二四八―二四九頁参照)。また、プラトンの作品ではヘーリオスは、他の天体とともに神とされている(『ソクラテスの弁明』26 b, 『国家』VI, 508 a, 『法律』X, 886 d-887 e; XII, 946 a-947 a)。しかし、古拙ないし古典期のアテナイでヘーリオスは崇拜されていなかったから、ヘーリオスの神官の存在を疑問視する見方がある(Parke, op. cit., p. 158)。これに対して、ヘーリオス尊崇はミュケーナイ時代から古典期に至るまで貴族的氏族の中に生きながらえてきた―例えば『イーリアス』III, 277や『オデュッセイア』XIIIで神とされている―とし、ヘーリオスの神官の同行はアテナイ・エレウシス間の宗教的契約を毎年更新する誓約のために必要であったとする解釈がある(Simon, op. cit., pp. 23-24)。他に、ロバートソンによれば、ここでのヘーリオスは正確にはアクロポリスに祭壇をもつゼウス・ヒュパトス(=至高の座に坐す)のことで、その形容辞は、晴天の空の太陽の位置を示すとす。Robertson, art. cit., p. 52.

(75) Parke, op. cit., pp. 158-159. プルタークによれば、アテナイ人は三つの聖なる耕作を実践する。―第位置にスキエロンで、第二にエレウシス付近のラリオンプ野で、第三にアクロポリスの下の「牛のくびき」と呼ばれる場所(Plutarch, *Moralia*, 144 A)。また「スキラ祭は本来、脱穀祭(スキラ=白いもの、脱穀された大麦)であり、王エレク

テウス(その名は「脱穀者」の意)にちつて、アクトロポリス上のアテーナーとアテナイ西方の耕地スキエロンは結びつけられてゐる」とも最近の解釈がある。Robertson, art. cit., pp. 52-56.

- (76) Aristodemos von Theban, *FGrHist*, 383 F. 9. Parke, op. cit., p. 160.
- (77) Pausanias, I, 24, 4. 馬場龍『上』一三三頁—一三三頁。
- (78) Pausanias, I, 28, 10. 馬場龍『上』一三六頁。
- (79) Aristophanes, *Loeb*, I, pp. 354-355. 『ギリシア喜劇Ⅰ』二八六頁。(なお、アリストパネスの『雲』は前四二三年、都市キエオニシマ祭初演である。)
- (80) Aeschines, 3, 244; *Loeb*, p. 500. Parke, op. cit., p. 163. (通常用いられた方法は、それらを海に投げ捨てることである。)
- (81) Deubner, op. cit., pp. 158 ff. Parke, op. cit., pp. 163-165. ブーフォニアについては、パウサニアスの記事の他に、ポルフォリオス(Porphyrrios, c. 232-c. 305)の記事があり、両者の間に若干食い違う点がある。この点、cf. Parke, op. cit., pp. 164-167.
- 以前には、トーテム理論を使った次のような説明が行われた。「アッティカの大氏族はすべてその先祖の標識を持っていて、これを彼らはスパルトイと同じように彼らの楯に示した……。牡牛の頭はブータダイの政治的勢力が全盛期にあった頃の铸貨にそれが現われていることによつて確かめられた。これらの『牛飼い(boutes)の息子たち』がアテネのブーフォニア Bouphonia に世襲的に参加していたことは、全く確実とはいえないまでも、ありそうな事である。そしてこのブーフォニアは共同体的氏族祭典を型どつた跡を明白に示している祝祭である。それは牡牛の犠牲より成り、トーテムのタブーの違反のために普通に用いられるような罪亡ぼしの儀式をともなっていた」(トムソン、前掲、上、一〇九—一〇頁)。「牡牛を選ぶ習慣は——牡牛は祭壇の上のせてある麦を食べるように誘われたのであるが(Paus. I. 24. 4)——責任をこの牛にさせるためのものであった……。その皮はあとで糞をつめて鋤につながれた(Porph. Abs. 2. 29-30)」。そしてこの事は破られたタブーが犁牛の屠殺を禁じた古い規則であったことを暗示している」(同書、三〇四頁、註九〇)。しかし、パークによれば、アッティカで牛がトーテムの動物として扱われたことを示唆するものは何も無いという。Parke, op. cit., p. 165.

(82) Parke, op. cit., p. 168.

(83) Mikalson, op. cit., p. 180.

(84) アルコーンの就任式に関しては、アゴラの西北隅にある列柱館「ストア・パシレイオス」の前に宣誓のための「石」(λίθος)

—幅一メートル、長さ二メートル、高さ〇・四メートルのポロス（ミューケーナイ時代のトロス墳墓のまぐさ石から採られたものか）が置かれていた。アリストテレスによれば、九人のアルコーンは評議会での資格審査の後、「切り刻まれた犠牲獣の横たわる石の前に進」み（*Paideiourgia pros tou lithou eph' ou ta toule' eorteu*）¹、この石の上に登って、正しく法律に従って治め、収賄しないことを誓う。その後アクロポリスに進み、そこで再び同じ誓いをなし、しかる後に任務につくのである。 *Athenian Politeia*, LV, 5; VII, 1. Loeb, p. 152; p. 26. 邦訳、九二—九四頁、および一四四頁訳註。 *Rhodes, Commentary*, pp. 135—136. なお、パークによれば、その供儀の場所はアゴラにある列柱館「ゼウスのストア」の前で、ゼウス像が建てられていたところを *ephebeion* という。 Parke, *op. cit.*, p. 168. Deubner, *op. cit.*, p. 175. しかし、パウサニウスによれば、これはゼウス・エレウテリオス（*Eleutherios* || 自由護持の）の像であった。 *Pausanias*, I, 3, 1—2. 飯尾訳、八頁。プラトン『テアゲス』121 Aや『エリヒクシアス』329 Aにも、解放の神ゼウスの柱廊としてでている。プラトン全集七、四頁、同十五、一一四頁。

(58) *Lysias*, 26, 6; Loeb, p. 564. Parke, *op. cit.*, pp. 168—169. 「アテナイ人が元旦のために国家の祭を何らもたなかったことは注目に値する。かれらにとっては、他のギリシア人同様、年よりもむしろ月が意義深い宗教的単位であった」(Parke, *op. cit.*, p. 29)。

三 アテナイの夏の祝祭（年始）

ヘカトンバイオーンの月の祝祭。—四日、アフロディシア祭。七日、ヘカトンバイア祭。一二日、クロニア祭。一五日—一六日、シュノイキア祭。一六日、エイレーネー祭。二三日—三〇日、パンアテーナイア祭（二八日、「ペプロス奉納」）。メタゲイトニオーンの月の祝祭。—七日、メタゲイトニア祭。一五日—一八日（または二三日—二〇日の間の四日間）、エレウシニア祭。日付不明、キュノサルゲスでのヘーラクレイア祭。

まず、アフロディシア祭（*Aphrodisia*）が多分ヘカトンバイオーンの月の四日に行われた。それはアフロディイデー・パンデーモス（*Pandemos* || 全市区で祀る）と説得の擬人化された女神ペイトー（*Peitho*）との祭祀であって、

両神をたたえる行列があった。前二八七年頃の碑文によれば、祭式として「父祖伝来の仕来りによって」(κατὰ τὴν πατρῶν) 聖所を鳩の血で浄化することや、祭壇に石灰塗料を塗ることや、祭神像がその洗淨の場所まで行列をなして運ばれることが記されている⁽⁸⁶⁾。また、パウサニアスは次のように記している。——アプロディーテー・パンデーモスの祭祀は、テーセウスがアテナイの人々を田園諸集落(デーモイ)から、たった一つの中心市に移らせたときに、説得女神ペイトーの祭祀と合わせて定めたものである。古来の祭神像は両女神とも私のときにはすでになかった。しかし、私の見た現在の像も、全くの無名とは言えない工匠たちの作品である⁽⁸⁷⁾。

次に、ヘカトンバイア祭(Hekatombaia)がかつてヘカトンバイオーンの月の七日に行われた。それは百頭(ヘカトン)の犠牲獣(ボウス)が供えられた神、アポローン・ヘカトンバイアの祭祀であった。しかし、この祭は、古典期になる前に重要性を失ってしまい、ただ月の名のみをその残存物として残した⁽⁸⁸⁾。

次に、クロニア祭(Kronia)がヘカトンバイオーンの月の二二日に行われた。それはティターン神族の神クロノス(Kronos)に捧げられた祭日であった。アテナイにはオリュンピエイオンのゼウス神殿の傍に、クロノスの聖域があった。クロノスは元来、穀物収穫の神で、刈入れ用の鎌をそのシンボルとしてもつ。彼の地位が他の神々に取って代わられた後は、神話に従ってゼウスの父として残存した。初期の時代に、この祭は月に名を与えてクロニオーンの月と呼ばれていたが、後にヘカトンバイオーンの月となった。古典期までにこの日の祭式として残存した唯一の特徴は、農場で働く全ての者が参加する一種の収穫の食事があったことである。デモステネスやプルタークによれば、奴隷もこの日ばかりは主人とともに食事(クロニアの食事)をとった後、自分たちの休日を楽しむことができた⁽⁸⁹⁾。

次に、シュノイキア祭(Synoikia)はヘカトンバイオーンの月の一五日〜一六日に行われた。それはテーセウスに帰されているシュノイキスモス、すなわちアッテイカの人々の一共同体への統合を祝う祭であって、トゥッキュディデスの時代にはアテーナー・ポリアスのための国家祭祀となった⁽⁹⁰⁾。前五世紀後半(403/2-400/399 B. C.)の国家供儀

暦の「隔年祭」に記された祭——その名前は現われていないが、明らかにシュノイキア祭である——は一五日と一六日の二日間にわたる。その最初の日には若い羊一頭の供儀、次の日にはゼウス・フラトリオスとアテーナー・フラトリアに対する若い牛二頭の供儀が行われる。この祭はアルカイックな、また貴族制的な性格をもつもので、イオニア人の四部族の長であるフィロバシレイスに因む基金（*ἐκ τῶν θυρίων Πρακτικῶν*、それから祭の費用を支払う）への言及や、ゲレオンテス部族（また、その一トリッテュス「白いヘッドバンドの人々」）への特別の言及がなされている。シュノイキア祭には、テーセウス伝説と結びついた他の祝祭と同様に「例年祭」があり、それは一六日に行われたと推定される。⁽⁹²⁾

次に、エイレーネー祭（*Eirene*）がヘカトンバイオーンの月の一六日に行われた。それは平和の擬人化された女神エイレーネー（*Eirēnē*）の祭であって、前四世紀にスパルタとの間によく休戦が成立したとき（374 B. C.）、平和を願って制定された新しい祭祀であった（シュノイキア祭と同じ日に行われた）。エイレーネーは、アゴラの祭壇で公的崇拜を受けた。ケフィソドトス（*Cephalodotus*、プラクシテレスの父）によって作られたエイレーネーの崇拜彫像は傑作であり、その子プルートのス（富を擬人化した神）を抱く姿で示された。スパルタとの平和は一年ほどしか続かなかつたが、この崇拜は存続したし、前三三三年には將軍たちがこの日かなりの犠牲を捧げたことが確かめられる。⁽⁹³⁾

次に、パンアテーナイア祭（*Panathenaia*）がヘカトンバイオーンの月の二三日〜三〇日に行われた。その祭の中日はアテーナー・ポリアスのための「ペプロス奉納」の行われる二八日で、この日を中心に前後四日以上続くアテナイの最大の祭典であった。⁽⁹⁴⁾ 年ごとのパンアテーナイア祭（*Παναθηναία τὰ κατ' ἐπέτειον*）と四年に一度（オリュンピア期の第三年）の大パンアテーナイア祭（*Παναθηναία τὰ μεγάληα*）があった。すでにホメーロスの『イーリアス』に記されているように、アテーナーへ奉獻する例年の祭は古くから行われていた。⁽⁹⁵⁾ そして、古典期にはこの祭

は真にアッティカの全住民、それにアテナイ帝国の住民すらも、都市の偉大な女神に敬意を表すために結集する大式典となった。ところで、アテーナーに奉納される女神の礼服ペプロス(ἑνζωός)は、アテナイの貴族の家系から選ばれた少女たちの一団エルガステイナイ(ἐργαστιναί)によって織られた。およそ九カ月前のカルケイア祭のとき、アクロポリスの上でアテーナーの神官とアレーフォロイ役の二人の少女によって織機に縦糸がかけられた。その後エルガステイナイはウールの布を織りすすみ、とくに装飾についてはつづれ織りの様式でそれを衣装に織り込んだ。ペプロスのデザインは、巨人族との戦いにおけるアテーナーの偉業のような伝統的テーマが用いられ、黄色や青色のような鮮やかな色彩で実施された。⁽⁹⁶⁾初期のペプロスはそれほど大きなものでなかったが、少なくとも前五世紀後半までに、それは船の帆ほどの大きさのものとなった。聖衣を風になびかせた祭礼行列の船は、ケラメイコスからアゴラ經由でアクロポリス斜面のエレウシニオンまで牽引された(この船には黄金色その他の色彩豊かな衣装を着た神官や女性神官が乗っていた)。その先のプロピュライアの上り坂はあまりにも大変だったので、ペプロスは取り外されてアクロポリス上へ運ばれた。⁽⁹⁷⁾ところで、アリストテレスは『アテナイ人の国制』(第六〇章一)に「競技委員を各部族から一名ずつ、都合十名を抽籤する。彼らは資格審査を受けた後四年間在任し、パンアテーナイア祭の祭列や音楽競技や体育競技や競馬を監督し、アテーナー女神の衣装を作らせ、評議会と協力して両手壺を作らせ競技「優勝」者に油を贈る」。また「競技委員はパンアテーナイア祭の行なわれるヘカトンバイオンの月には月の第四日からプリュタネイオンで食事する」(第六二章二)と書いている。⁽⁹⁸⁾この競技委員(ἀγροβέται)は四年間パンアテーナイア祭を専門に司る役人たちで、祭の直前には二十日間以上の継続的な会合をもって準備に当たった。ただし、その名称からすれば、当初の任務はこの祭の諸種の競技を組織することであったであろう。それが、やがて大行列を含め大パンアテーナイア祭全体の責任をもつようになったものと推測される。⁽⁹⁹⁾これに対して、年毎の(κατ' ἐνιαυτόν)十人の犠牲委員(ἑποποροί)の役割は、大パンアテーナイア祭には犠牲獣を供えるのみであったが、大パンアテーナイア祭を除

く全ての四年毎の祭——デロスの祭への派遣、ブラウロニア、ヘーラクレイア、エレウシニア、ヘーパイステイア——を担当した⁽¹⁰⁾。彼らはまた例年のパンアテーナイア祭を担当したと考えられる⁽¹⁰⁾。

大パンアテーナイア祭の初めの数日は、馬術や体育競技や、音楽の競演が行われた。パンアテーナイアの祭日やペプロス奉納は少なくとも前七世紀から存在していた。しかし、祭の大衆的関心を大いに高めた要素は、前六世紀に加えられたスポーツ競技のプログラムであった。アテナイの貴族ヒッポクレイデス(Hippocleides)は前五六六/五年にアルコーンとなり、オリュンピアを始めとする幾つかのパンヘレニックなゲームにならって、スポーツ競技会を創設したと考えられる⁽¹⁰²⁾。それを僭主ペイシストラトスが発展させ、さらにパンアテーナイア祭独自のものとして、ホメーロスの作品の吟唱(ラプソディー)の競技を行った。その後、ペリクレスの時までにさまざま音楽的コンテストが加えられ、コンサート・ホールとしてオデオンが建てられた。音楽競技には、叙事詩吟唱のほか、竖琴キタラや笛に合わせた歌曲、キタラや笛のソロ演奏があった。スポーツ競技には、徒競走(スタディオーン)、五種競技(ペンタタロン)——徒競走、幅跳び、円盤投げ、槍投げ、レスリングの五種)、レスリング、ボクシング、パンクラティオンがあり、競技者は年齢によって三階級——少年、ヒゲのない青年、および壮年——に分かれていた。馬術にはたんなる乗馬の他、四頭立てチャリオット・レース、二頭立てチャリオット・レース、馬上からの槍投げなどがあった。団体競技には、武装して演じられるピュリック・ダンス、男らしさの徳の競技(エウアンドリア)⁽¹⁰³⁾、ペイライエウスにおける船のレースがあった⁽¹⁰⁴⁾。それから、大行列の日の前日夕方⁽¹⁰⁵⁾には、松明競技(ランパードロミア)が行われた。供儀のためのアテーナーの祭壇の火は、ディピュリン門の外側のアカデメイアにあるエロースの祭壇から採られた。そして松明をもって走る個人的レースの勝者、つまり松明の火を消さずに到着した最初の走者の松明によって点火された⁽¹⁰⁶⁾。人々はこのレースを観戦した後、そのまま少女中心の夜祭り(パンニューキス)を催して翌朝を迎えた⁽¹⁰⁷⁾。

さて、パンアテーナイア祭の大行列は、彫刻家ペイディアスによって理想化された形でパルテノン・フリーズのな

かに表現された。そのためにパルテノンの本堂 (Μναστήριον) の四面を巡る、高さ一メートル、長さ一六〇メートルのフリーズに、数多くの群像——動物は別として約三六〇人の人物——を描き、これらを一定の秩序の中に統率する必要があった。西側からフリーズを見始めると、北側あるいは南側でともに行列の展開が継続して東側ファサードに向かって進んで行く光景が見られる。西側フリーズでは、最後の騎士が侍者の手をかりて出発の準備をしている。その先の南北の両フリーズには、パンアテーナイア祭の不滅の騎馬行列がある。——調和のある整った隊列、潑刺とした躍動観、リズミカルな馬の足並み、そして騎士たちは若く、慎みある気品をそなえている。騎馬の前には、競技用の四頭立てのチャリオットと甲冑を着たその乗員・アポパテース (ἀποπάτης = 「降りる人」の意) が描かれている。さらに行列の先にはオリヴの若枝を持つ老人 (タロフォロイ)、キタラ奏者と笛吹き、片手で水瓶をかつぐ四人の若者 (スポンドフォロイ)、金属製の盆の供物入れを運ぶ居留外国人 (スカフェフォロイ) が進む。その前は、若い役人たちと犠牲獣 (南側に十頭の牛、北側に牛と羊) が占めている。東側のフリーズの左右の隅からは、中央に向かって淑やかな女性たちの行列が進む。先ず最初に、献酒用の盃 (フィアレ) や取手付き壺 (オイノコエ) や香炉をもつ着飾った少女たち、次に行列の先頭には空手で歩む少女たち、それは右側では指揮者に分たれて二人ずつとなっている。この一列目の少女たちはペプロスを織ったエルガステイナイ、または聖籠を運ぶカネーフォロイであると解される。フリーズでは、行列は堂の内部において、折り畳んだペプロスの奉納で終っている。

次に、メタゲイトニア祭 (Metageitnia) がメタゲイトニオンの月の七日に行われた。それはアポローン・メタゲイトニオスの祭であり、月の名となったものであるが、古典期までには重要性が失われていた。この語は「隣人」(γείτων) を「変える人」と (μετα-) の意味であるので、引越、あるいは近隣の人々とのつきあいを含む何らかの祭であったと思われる。なお、アッティカのサラミニオイ・ゲノスは、この日、アポローン・パトロイイオス (Patroios = 父祖伝来の神)、レートー、アルテミス、およびアテーナーに対する供儀を行った。またイオニアのミ

レトスでは、祭日として祝われていた。⁽¹¹⁾

次に、エレウシニア祭 (Eleusinia) がメタゲイトニオーンの月の一五日〜一八日に行われた (または一三日〜二〇日の間の四日間⁽¹²⁾)。エレウシニア祭はエレウシス中心のデーメーテールの祭で、その例年の祭は収穫祭 (供儀と初穂奉納が行われる)、数年毎の祭は競技会であったという。⁽¹³⁾ 後者には四年に一度 (オリュンピア期の第二年) の大エレウシニア祭と、二年に一度 (オリュンピア期の第一年と第三年) の小エレウシニア祭があった。⁽¹⁴⁾

次に、キュノサルゲスでのヘーラクレイア祭 (Herakleia at Kynosarges) が、メタゲイトニオーンの月に (日付不明) 行われた。ヘーラクレースは運動競技の守護神性であり、その民衆的描写によれば大いに飲食に耽った英雄である。キュノサルゲスの体育場のクラブは特別に非市民に開かれており——アテナイ人と外国人妻との間に生まれた子供が多かった——、ヘーラクレース崇拜の役人たちもその階層から選出されていた。そして、彼の食事に対する神の同席を保証するために、十二人の「食客」(Parastoi) が選ばれた。また、テオフラストス著『人さまざま』の「年寄りの冷水」に、この祭の宴会についての次のような言及がある。——これも彼ならではのしぐさだが、ヘーラクレースの祭に招かれでもすると、犠牲に牡牛を選び、上衣を脱ぎ捨て、牛の首を牛切り人の方へねじ向けてみせる。⁽¹⁵⁾

注

- (11) IG II² 659. Simon, op. cit., pp. 48-50. シーモンはこの祭を集住祭・シノイキスモスに由来するものであるとする。
 なお Parke を Mikalson ではなく、この祭の言及が見られない。
- (12) Pausanias, I, 22, 3. 馬場訳、上、一〇二頁。
- (13) Parke, op. cit., p. 29. Mikalson, op. cit., p. 26. 「ヘカタンハイオンと呼ばれるアッティカ暦の第一月は、真夏の間に、夏至の前の新月をもって始まった」(Parke, ibid.)。
- (14) Demosthenes, 24, 26; Loeb, p. 388. Plutarch, Theseus, 12, 1. Parke, op. cit., p. 30. Mikalson, op. cit., p. 28.

- (95) Thucydides, II, 15. (cf. Plutarch, Theseus, 24, 4.)
- (96) J. H. Oliver, *Hesperia*, 4, 1935, p. 21, p. 26. Parke, op. cit., pp. 31-32.
- (97) Mikalson, op. cit., p. 31.
- (98) Isocrates, 15, 109; Loeb, II, p. 246. IG II² 1496. Parke, pp. 32-33.
- (99) Mikalson, op. cit., p. 34.
- (95) 「アテーナイの、よく築かれた城市（しろまち）を領する人々、それは心の大きなエレテウスの邑（さと）である、その人をむかしゼウスの娘アテーネー女神が養い育てた、生みの親は、麦を実らす畑土だった、それを（女神が）アテーナイへと、自分の豊かな社殿にお坐らせになった、その場所で、アテーナイ人の若者どもが、めぐってくる年ごとに、牡牛だの小羊だのを女神に献じて、祭をし神意をなだめまづる習わしである。」Homer, *Iliad*, II, 546 ff. 『ホメーロス』「イーリアス・オデュッセイア」、呉茂一・高津春繁訳、筑摩書房、一九七一年、二七頁。
- 以前にはアテーナーの奉納の祭列は、イリソス川の土手から市の中心部であった南東地区の諸神殿を巡ってアクロポリスへ向かったと思われる。そして、ある早い時期からピュリック・ダンスと四頭立てチャリオットのアポパテースの競技は行われていた。しかし、市の北西地区の発展に伴い、アクロポリスの北西に新アゴラを中心とする市の新しい中心ができ、パンアテーナイアの祭列もケラメイコスからアゴラを通過してアクロポリスへ向かうコースを辿るようになった。前六〇〇年頃、北東エーゲ海地方からヘーパイストスの祭祀がアテナイにもたらされると、それをアテーナーの祭祀と関連づけるための神話の改訂作業が行われ（ヘーパイストスの欲情から生じた子がエリクトニオスで、それをアテーナーが育てたとする）、パンアテーナイア祭の行事にも新たな形式と意義がもたらされた。そして祭日の夕方、ヘーパイストスに由来する松明競技をアカ데미アのエロースの祭壇を起点として行い、アクロポリスでの少女たちの夜祭りを経て、早朝に始まる大行列ではペプロスを翻した船型の車を牽引するようになった。 Robertson, art. cit., pp. 56-65.
- (96) ペプロスの図案はアテーナーの武勇を賛える伝統的テーマであったこと、そのデザインナーはコンテストを経て評議会、後には陪審法廷によって決められたことは、次のような一節からもうかがえる。——「では君は、ほんとうに戦争というものもあると考えているのかね、神々の間でお互いに対してね?……とりわけまたパンアテーナイア大祭には、そのような刺繍を一面にほどこした礼服がフクロポリスに運び上げられるわけだが、そういった多くの事柄もね」（プラトン『エウテュポン』6B-C。プラトン全集一、今林万里子訳、一六頁）。「評議会は以前は公共建築物の模型やアテーナー女神の衣装をも判定したが、今では当選した陪審廷がこれに当たる。何となれば評議員たちは選定に当たって情実に捉われると思われたか」(Athensian Politeia, XL, 3. 邦訳、八四—八五頁。cf. Rhodes, *Commentary*, pp. 568-569.

- (97) パウサニアスは次のように書いている。「アレイオス・パゴスの近くに、パンアテーナイア祭の行列用に作った船が展示してある。これを追い越すほどの船はすでにあるが、甲板から下に九層にも及ぶ槽手座をそなえたテロスの軍船に、打ち勝った船造りがこれまでにいたことを知らない。」 Pausanias, I, 29, 1. 飯尾訳、五八頁。 cf. Parke, op. cit., p. 39.
- (98) *Athenion Politeia*, LX, 1; LXII, 2. 邦訳、一〇〇頁、一〇三頁。
- (99) Cf. Rhodes, *Commentary*, pp. 669-670.
- (100) *Athenion Politeia*, LIV, 7. 邦訳、九二—九三頁。
- (101) Cf. *Decretum Atticum de Panathenaeis* c. a. 335/4, *Sylloge* 271. Rhodes, *Commentary*, p. 568. Parke, op. cit., pp. 47-48.
- (102) また、第一回の大祭は、前五六六年であると思われる。 Parke, op. cit., p. 34. Simon, op. cit., pp. 55-58. cf. Herodotus, VI, 127-129. 邦訳、二九八—二九九頁。
- (103) 内容不明であるが、合唱コンテスト (a cyclic chorus) であるとする解釈がある。 Alan L. Boegehold, "Group and Single Competitions at the Panathenaia," in Neils (ed.), op. cit., pp. 97-104. また、優勝チームへの賞品は、アリストテレスによれば楯 (*paris*) である。 *Athenion Politeia*, LX, 3. Loeb, pp. 164-165. 邦訳、一〇二頁。
- (104) Parke, op. cit., pp. 34-37.
- (105) フライの祭と同様、ギリシア人とローマ人の祭は、厳密には日没に始まると見なされうる。その意味では、松明競技、夜祭り、それに大行列と供儀は同日の行事である。 Parke op. cit., p. 49. cf. Mikalson, op. cit., p. 24, p. 34.
- (106) Parke, op. cit., p. 45-46. Simon, op. cit., p. 64. cf. Plutarch, Solon, 1. 邦訳(一)、八頁。——松明競技はアカデミアのエロースの祭壇から採火された。ただし、パウサニアスは、松明競技の起点をアカデミアに古くから祀られていたプロメーテウスの祭壇とする。 Pausanias, I, 30, 2. 飯尾訳、六三頁。他に、アリストパネス『蛙』一〇八九—一〇〇。『ギリシア喜劇II』、二七四頁。太田秀通『ポリスの市民生活』河出書房新社、一九七五年、七四—七六頁(エフェーボイによる、リレー式松明競技であったとする)。
- (107) エウリピデス『ヘラクレスの子供たち』の一節に夜祭りの舞踏の様子がでていいる。——「おん前に あまたなる 捧げ物して、／たたえまつる いつの日も 畏みてこそ。／よもや忘れじ 月々の おわりの日にも。／若き子らは 声をあわせ 歌をあわせ、／乙女子は 風さやぐ 丘にのぼりて、／夜をこめて 足拍子 踏みならしつ、／喜びみちて、高らかに 歌いまつらん。』『ギリシア悲劇III』柳沼重剛訳、一八六頁。

- (108) M・コリニオン『パルテノン』富永惣一訳、岩波書店、一九七八年、一八九―一九九頁。 Jenkins, op. cit., p. 23.
- (109) 一列目の少女たちをパプロスを織り終えたエルガステイナイとする説は、コリニオンやパークに見られる。パークによれば、エルガステイナイは一年間に少なくとも百名ほど選ばれていたであろうが、パルテノン・フリーズでは左右の行列の先頭に二人人組で表わされた。 Parke, op. cit., p. 38, pp. 43-44. しかし、彼女たちを供養用の大麦を入れた聖籠 (kanois) を頭上に向けて運ぶカネーフォロイであるとする説が有力である。ジューモンによれば、彼女たちは到着して向かい合っている指揮官に聖籠を渡し終えたために空手である。ハリソンによれば、むしろ資格審査などおいて聖籠を渡されようとする少女たちが描かれている。 Simon, pp. 60-61. Evelyn B. Harrison, "The Web of History," in Neils (ed.), op. cit., p. 210. もっとも、エルガステイナイはまたカネーフォロイとして奉仕したかもしれないという説もある。 Mary R. Lefkowitz, "Women in the Panathenaic and Other Festivals," in Neils (ed.), op. cit., 79.
- (110) この東側フリーズの中央には、折り畳んだパプロスをもつバシレウスと少年、またストールを運ぶ二人の少女とそれを手伝っているアテーナーの女性神官が描かれている。ただし、この中央場面の解釈には諸説がある。 cf. Jenkins, op. cit., p. 79. Simon, op. cit., pp. 66-67. Parke, op. cit., pp. 40-41.
- (111) Putarch, *Moralia*, 601 B. W. S. Ferguson, *Hesperia*, 7, 1938, pp. 3-5. Mikalson, op. cit., p. 36. Parke, op. cit., p. 51.
- (112) Mikalson, op. cit., pp. 40-46.
- (113) Kevin Clinton, "IG 1² 5, The eleusinia, and The eleusinians," *American Journal of Philology*, vol. 100, no. 1, 1979, pp. 1-12.
- (114) Mikalson, op. cit., p. 46. 桜井万里子「エレウシスの祭儀とアテナイ民主政の進展」、『史学雑誌』八二編一〇号、一九七三年、二四頁、注三六。
- (115) Theophrastus, *Characters*. 森進一訳『人さまざま』、岩波書店、一一〇頁。